

ASPIC

2026 春季

クラウドマガジン

Vol.3

ASPIC25周年記念式典号

第1部 ASPIC創立25周年 功勞表彰式

第2部 ASPIC創立25周年 記念講演会

第3部 ASPIC創立25周年 御礼・意見交換の会



一般社団法人日本クラウド産業協会 特集 25周年記念式典

目次

特集 ASPIC創立25周年記念式典	1
ASPIC25年間の取り組みと今後の展望 一般社団法人日本クラウド産業協会 会長挨拶 河合 輝欣	2
ASPIC25年の活動への思いと評価、未来に向けた提言	7
ASPIC25年の成果	10
ビジュアル年表	12
式次第	14
第3部 ASPIC創立25周年 御礼・意見交換の会	15
一般社団法人日本クラウド産業協会 会長挨拶 河合 輝欣	16
来賓祝辞	
・参議院議員 いんどう 周 作様	17
・総務省 総合通信基盤局長 湯本 博信様	18
・東洋大学教授 阪本 泰男様 (元・総務省 総務審議官)	19
・一般財団法人 マルチメディア振興センター 理事長 桜井 俊様 (元・総務事務次官)	20
・国立研究開発法人 情報通信研究機構 理事長 徳田 英幸様 (ビデオメッセージ)	21
・一般財団法人 医療情報システム開発センター 理事長 山本 隆一様	22
・情報セキュリティ大学院 大学教授 後藤 厚宏様	23
・東京都立科学技術大学 名誉教授 島田 達巳様	24
・株式会社NTTデータグループ 取締役常務執行役員 西村 忠興様	25
祝辞・乾杯	
・内閣官房 サイバー通信情報監理委員会設置準備室 内閣参事官 高村 信様	26
中締め挨拶	
・一般社団法人日本クラウド産業協会 常務理事 村松 充雄	27
歓談・意見交換	28
来賓紹介	29
「御礼・意見交換の会」会場で寄せられた声	30
第2部 ASPIC創立25周年 記念講演会	32
来賓祝辞	
・衆議院議員 総務大臣政務官 向山 淳様	33
講演	
(1) Preferred Networks (株) 共同創業者・代表取締役 最高技術責任者 岡野原 大輔様	34
(2) NTT (株) チーフエグゼクティブフェロー (前・代表取締役副社長) 川添 雄彦様	38
(3) 総務省 情報流通行政局 情報通信政策課長 中村 裕治様	42
第1部 ASPIC創立25周年 功労表彰式	46
一般社団法人日本クラウド産業協会 会長挨拶 河合 輝欣	
来賓祝辞	
総務省 情報流通行政局 情報流通振興課長 大澤 健様	47
受賞者代表挨拶	48
受賞者集合写真	50
(1) 理事・役員功労表彰者一覧	52
(2) 会員功労表彰社一覧	54
25周年記念式典/25周年記念号発刊 実施プロセス/ASPIC事務局お問い合わせ窓口	58
ASPIC法人会員新規入会企業一覧	59
ASPICクラウドサービス情報開示認定 新規認定サービス一覧	60
奥付	65



1999年11月の創立以来、日本初のクラウド業界団体として、四半世紀にわたって歩みを重ねてきたASPIC。その節目を祝し2025年11月19日(水)、東京都千代田区・経団連会館にて「創立25周年功労表彰式、記念講演会及び御礼・意見交換の会」を執り行いました。

3部構成の式典には、ASPIC会員をはじめ、総務省等の関係省庁、大学・学術機関、関係団体など幅広い分野から、延べ800人超にご来場いただきました。

第1部「創立25周年功労表彰式」の大きな目的はASPICが創立以来、活動を継続し、発展を遂げてこられた最大の原動力が、理事・役員、会員の皆さま一人ひとりの支えにあったという事実を改めて共有することにあります。長きにわたる功績に敬意を表するとともに、弊協会一同の「感謝を形としてお伝えしたい」という思いから、創立以来初めて実施いたしました。

第2部「記念講演会」は、クラウド業界の最新情報と今後の方向性を、参加者とともに改めて確認する場として企画。講演者としてAI、インフラ、情報通信政策など、各分野の第一線で活躍する3名の著名な識者をお迎えしました。

いずれの講演も単なる情報提供にとどまらず、登壇者

の経験や洞察に満ちた視点が示されており、参加者一人ひとりにとって、クラウドの可能性と課題を実践的に捉える好機となったことでしょう。

第3部「御礼・意見交換の会」では、これまでご助力をいただいた、政・財・官・学を代表する10名の来賓から、これまでの思い出や次の時代に向けた期待、提言を含む祝辞を頂戴いたしました。

その後のパーティーは、主催者から直接感謝の思いをお伝えするとともに、すべての参加者が立場や分野の垣根を越え、クラウド業界の未来について、率直に意見を交わす場として設けられたものです。創立25周年記念の締めくくりとしてふさわしい温かい空気の中、多くの来場者とともに、四半世紀にわたる歩みを振り返り、未来について語らう、印象深いひとときとなりました。

本誌では、この式典の模様を特集として紹介いたします。当日ご来場いただいた方々には、式典の余韻や記憶を呼び起こす一助として。また、やむを得ず参加が叶わなかった方々には、会場の空気感や意義を追体験いただく手がかりとして、本実施報告をご覧ください(なお、本誌ではご登壇者の敬称は略させていただきますので、あらかじめご了承をお願いいたします)。

ASPIC25年間の取り組みと今後の展望

～クラウドマガジン Vol.3 発刊のご挨拶～



一般社団法人 日本クラウド産業協会 会長

河合 輝欣

TERUYOSHI KAWAI
(株式会社ユー・エス・イー 取締役会長)

～はじめに～「創立25周年記念講演会及び御礼・意見交換の会」のご報告

ここに『ASPICクラウドマガジン ASPIC25周年記念式典号』をお届けできますことを、大変うれしく思うとともに、日頃より弊協会の活動をご支援くださっております皆さまに、心より感謝を申し上げます。

2025年11月19日、一般社団法人日本クラウド産業協会（ASPIC）は、東京都千代田区・経団連会館において、「創立25周年功労表彰式、記念講演会及び御礼・意見交換の会」を開催いたしました。当日は、寒さ厳しき折にもかかわらず、総務省をはじめとする関係省庁、大学・学術機関、関係団体、会員企業の皆さまなど、非常に幅広い分野から多くの方々にご参集いただきました。ご多忙の中ご臨席を賜りましたこと、主催者を代表し、改めて厚く御礼いたします。

ご参加いただいた皆さまにとって、本会が、ASPICの25年の歴史を振り返るとともに、これからのクラウド産業の展望や、弊協会が果たすべき役割について思いを共有する機会となっていれば、これに勝る喜びはありません。

そこで今回、「創立25周年記念式典」を通じて得られた成果や意義を振り返り、その内容を本誌にてご報告することいたしました。

なお、式典当日は「第1部・功労表彰式」「第2部・記念講演会」「第3部・御礼・意見交換の会」の順でプログラムを進行いたしました。しかし、本誌の式典実施報告では、「御礼・意見交換の会」「記念講演会」「功労表彰式」の順にご紹介いたします。

「御礼・意見交換の会」は、これまでASPICがお世話になってきた多くの皆さまからご祝辞を賜るとともに、当日会場にお集まりいただいた方々へ直接お礼をお伝えし、貴重なご意見を拝聴する場として、私どもが最も重視したものです。

「記念講演会」には、著名な3名の識者をお招きいたしました。多くの聴衆の皆さまとともに業界の最新動向に触れることができた、大変貴重な機会となりました。

「功労表彰式」は、創立以来、初の取り組みでした。この節目に、長年にわたりASPICの拡大・発展、そしてクラウド業界の成長に力を尽くしてこられた理事・役員、会員企業の皆さまに、心からの敬意と感謝をお伝えしたい——その思いから、28名の理事・役員、29社の会員企業を表彰いたしました。

25年間の活動で、存在感あるクラウド業界団体に成長

ASPICは1999年、「ASPインダストリ・コンソーシアム・ジャパン」として創立いたしました。当時は、IoTやAIはもちろんのこと、ASP・SaaSという言葉さえ一般的ではなく、クラウドはまさに黎明期であり、その可能性や価値を理解する人は非常にまれでございました。

そのような時代から、私たちは「ASP・SaaS・クラウドの普及促進と市場拡大」に取り組んできました。その後も、時代の変化に対応しながら、「安心・安全なクラウドサービスの推進」と「ASPICの組織強化および社会的プレゼンスの向上」という新たな柱を打ち立て、この3つの大きな目標を軸に活動を積み重ねてまいりました。

以来25年間にわたり、クラウド業界全体、および弊協会の

発展にまい進したことで、現在では、会員数1400社を誇る、この業界において存在感のある団体となることができました。

ここまで歩んでくることができたのは、ひとえに理事・役員・会員の皆さま、そして総務省をはじめとする関係各位の長年にわたるご指導、ご支援のたまものです。改めて、心より感謝申し上げます。

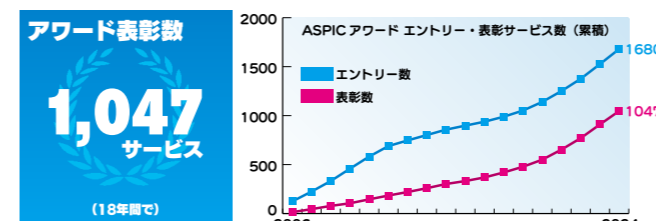
ASP・SaaS・クラウドの普及促進と市場拡大

ここからは、3大目標に沿って、ASPIC25年の成果についてご説明させていただきます。

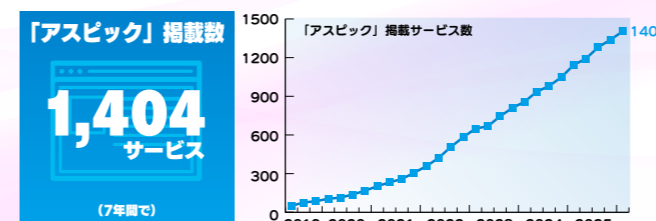
①**ASPICクラウドアワード** 「ASP・SaaS・クラウドの普及促進と市場拡大」のため、ASPICでは「ASPICクラウドアワード」を、2007年の第1回から18年間にわたり実施し、これまでに多くの優れたクラウドサービスを表彰するとともに、受賞企業のビジネス展開を支援してきました。

当アワードは開始当初、順調なスタートを切ったものの、その後、応募数や表彰件数が思うように伸びない、試行錯誤の時期がしばらく続きました。

しかし、総務省のご協力で2015年、その年最高のクラウドサービスに贈られる「総務大臣賞」を創設し、弊協会の打ったさまざまな施策とも相まって、アワードの注目度は再び向上しました。現在では、累計1047件のクラウドサービス（10の総務大臣賞を含む）を表彰し、毎年約100件以上の応募が寄せられるなど、極めて活発な取り組みとなっております。



②**クラウドサービス紹介サイト「アスピック」** 「アスピック」は、クラウド利用者にクラウドサービスを紹介し、それによって事業者のビジネス支援に寄与するサービスとして、2019年に事業を開始しました。当サービスは、決して順調なスタートを切ったわけではありませんでしたが、会員企業の皆さまの継続的なご支援に加え、ASPICのブランド力の向上、運営委託会社・株式会社ブルートーンのご尽力、そして掲載事業者の皆さまの不断の努力により、状況は次第に改善してまい



りました。現在、「アスピック」は、1400を超えるクラウドサービスを紹介するのみならず、月間30万ビューを達成するまでに成長いたしました。また、本サービスは「普及促進と市場拡大」の面でも、大きな成果を挙げております。

③**各種情報発信** ASPICは創立当初から、クラウドの普及促進を目的に、イベントやセミナー等を通じて、社会全体に向けた情報発信を行うことで、事業者を支援してまいりました。メールや会員用Webでお届けする『クラウドトピックス』『AIフロンティア』『Security Watch』等で、年間170回程度の定期的な発信を行っております。

④**クラウドビジネス研究会** 研究活動も活発であり、年間20回以上、累計500回を超える研究会を開催しています。これらの取り組みは単なる研究にとどまらず、そこから新たなビジネスや制度が生まれ、市場の拡大にも大きく寄与しています。

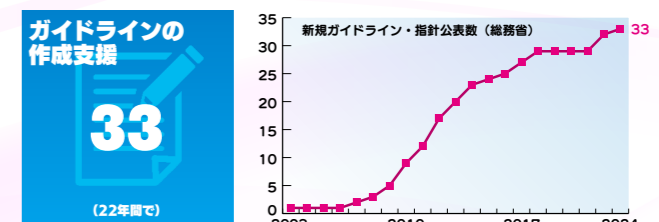
特に医療分野では、研究会をきっかけに医療情報の外部保存に関するガイドラインを総務省に提案し、医療・介護分野におけるクラウド活用市場の創出につながった事例もあります。

安心・安全なクラウドサービスの推進

①**33件のセキュリティガイドライン等の作成と、ASP・SaaS・クラウド普及促進協議会等の推進** 「安心・安全なクラウドサービスの推進」に係る活動として、総務省とともに各種ガイドラインの策定に注力してきました。

2000年頃から、「本格的に取り組む必要があるのではないか」という問題意識のもと検討を開始し、2003年に総務省が公表した「公共ITアウトソーシングに関するガイドライン」が、ASPICによるガイドライン作成支援の発端となりました。

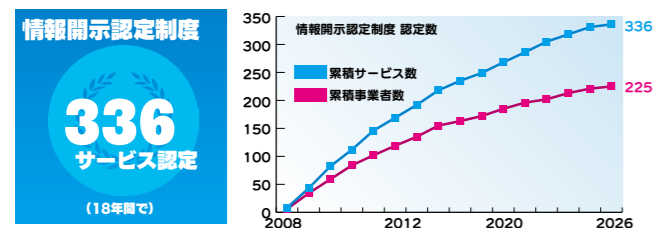
2007年に総務省と合同で「ASP・SaaS・クラウド普及促進協議会」、2009年に総務省と連携し「ASP・SaaSデータセンター促進協議会」を設立し、総務省のご指導を受けながら作成支援活動は本格化していきました。結果、現在までに33の検討委員会を設置し、各種ガイドラインおよび情報開示指針を合わせて33件策定（総務省公表）するに至っています。



②**336件のサービスを認定した「情報開示認定制度」** 総務省公表の情報開示指針をもとに立ち上げたのが、「クラウドサービスの安全・信頼性に係る情報開示認定制度」です。本制度では、第三者機関であるASPICが、クラウド事業者が提供するサービスについて、「安心・安全に関する情報」を適切に開

示していることを認定する仕組みです。

2008年にスタートした本制度は、現在、ASP・SaaS、医療、特定個人情報、IoT、AI、IaaS・PaaS、データセンターなど、8分野に展開しており、これまでに累計336サービスを認定し、事業者のビジネス展開に貢献してきました。



ASPIC の組織強化と社会的プレゼンスの向上

①一般社団法人への改編と協会名の変更 「組織的評価および社会的プレゼンスの向上」に関しては、2020年にNPO法人から一般社団法人に改組することで、組織基盤を強化しました。

2022年には、協会名を「一般社団法人日本クラウド産業協会」と改めました。前述のように、創立時は「ASPインダストリー・コンソーシアム・ジャパン」という名称でしたが、活動内容の刷新にともない、SaaSやIoTなどのキーワードを付け足していった結果、「一般社団法人ASP・SaaS・AI・IoTクラウド産業協会」という長い名称になっていたのを、明快な名前に変更いたしました。この新名称は関係者からも「活動内容が一目で伝わる」と好評で、一般社団法人への改組と併せて、ASPICブランドの向上に寄与しております。

②会員制度の拡充による組織強化 会員制度の拡充にも取り組み、従前からの法人会員に加え、2023年より「情報開示認定」取得事業者や「アスピック」掲載事業者を「パートナー会員」として組織化しました。2024年には、「ASPICクラウドアワード」の受賞事業者を「アワード会員」として、さらに2025年からは、クラウドサービス検索サイト「アスピック」利用者のうち希望者を、新たに「ユーザー会員」として組織化しています。これにより、利用者の声を会員企業へ届ける仕組みが整い、ASPICが目指す「事業者と利用者が一体となった団体」の実現に一步近づくことができました。こうした制度の拡充により、会員数は1400を超え、弊協会のクラウド業界におけるプレゼンスはさらに向上いたしました。また、ASPICと会員の間のコミュニケーションも一層活発になり、会員同士のビ



ジネス連携の深化にもつながっております。

③ASPIC 4大支援（サービスバリューチェーン） ASPICでは、クラウド事業者が事業機会を広げ、信頼性を高めていくための仕組みとして、「4大支援（押す・引っ張る・支える・組む）」を展開しています。

まず、事業者を「押す」活動として、「ASPICクラウドアワード」で優れたサービスを表彰し、その価値を広く社会へ発信しています。

「引っ張る」活動では、クラウドサービス紹介サイト「アスピック」において事業者の取り組みを利用者に紹介し、ビジネス機会の拡大をけん引します。

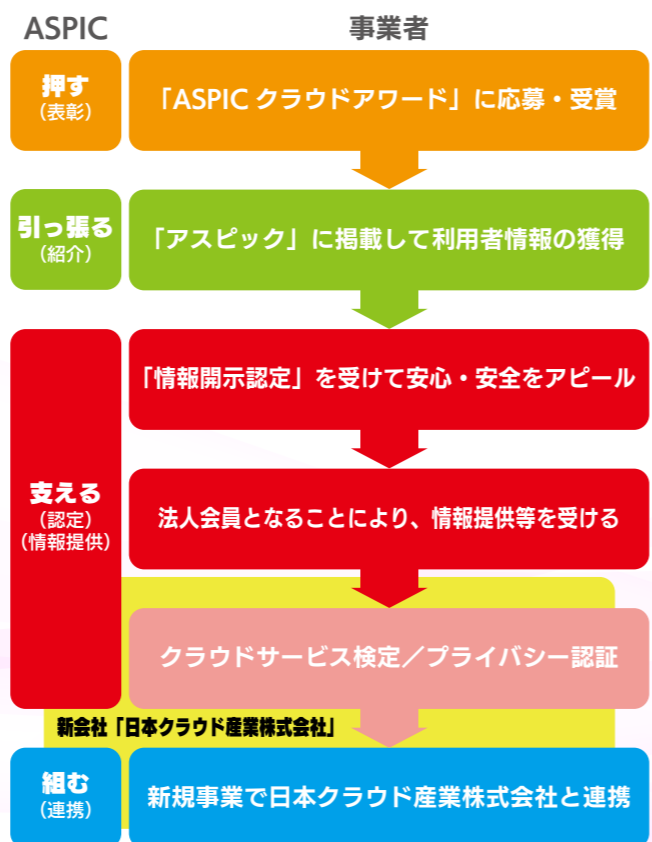
事業者を「支える」活動として、サービスの安心・安全を担保する「情報開示認定制度」を運用するとともに、会員に向けた各種情報提供などの支援を行っています。

さらに「組む」活動として、事業者の皆さまと連携し、後述する新会社「日本クラウド産業株式会社」とともに新たな事業の推進にも取り組んでまいります。

ASPICではこれらの取り組みを「接着剤」のようにつなぎ、相互に価値を高め合う仕組みとして「ASPICサービスバリューチェーン」を構築しました。

事業者は、バリューチェーンを活用することで、「クラウドアワード」でサービスを社会に広め、「アスピック」に掲載し

ASPIC 4大支援（押す・引っ張る・支える・組む）～サービスバリューチェーン～



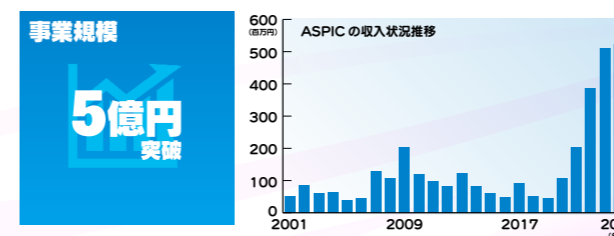
て利用者情報を獲得でき、「情報開示認定制度」の認定で安心・安全をアピールできます。結果として、ASPICの仕組みを通じて認知の向上、信頼性の強化、そしてビジネス機会の拡大を図ることが可能なのです。

さらに、法人会員になれば、ASPICが提供するクラウド関連の最新情報を享受できるほか、「日本クラウド産業株式会社」と新規事業を創出する機会も広がります。ひとつのサービスを利用することで、他のサービスを優遇価格で活用できる仕組みも用意しています。このように「ASPICサービスバリューチェーン」は、会員企業にとって多面的なメリットを生み出す構造になっているのです。

今後は、後述の「ASPICクラウドサービス検定」や「ASPICプライバシー認証サービス」、個人情報保護に関する検定プログラムなども加え、バリューチェーンを強化する予定です。

④政府等への提言 日本を代表するクラウド団体であるASPICは、政府等の要請を受けてさまざまな部会や委員会に参画しています。私も、2007年に総務大臣によって情報通信審議会「ICTによる生産性向上に関する検討委員会」専門委員に任命されたことを始め、総務省「ICT街づくり推進会議 検討部会」（2013年）、総務省・経済産業省「クラウドサービスの安全性評価に関する検討会（ISMAP）」（2018年）、独立行政法人情報処理推進機構（IPA）「クラウドサービス審査委員会（ISMAP）」などにも参加いたしました。それらの場で業界団体として積極的に提言を行うことで、クラウド業界全体の発展に寄与するとともに、ASPICのプレゼンス向上にもつなげています。

⑤新たな展開に向けた経営基盤の確立 上記の各種施策や、各種会員サービス、調査研究の受託事業、情報開示認定事業、「アスピック」事業などを着実に推進したことで、現在、ASPICは会員数1400社を超える規模にまで成長し、事業収入も5億円を超える水準となり、新たな事業展開に向けた経営基盤も整ってきました。



⑥国および政府からの評価 こうした実績が評価され、2008年にはASPICとして「情報通信月間・総務大臣表彰」を受賞し、2012年にはASPIC会長の私個人としても同表彰を拝受いたしました。さらに2023年には、ASPIC会長として旭日小綬章を受勲するという大変な光栄を賜りました。

これらはいずれも、総務省をはじめとする関係者の皆さまの

ご支援のたまものであり、心より感謝申し上げます。この3つの栄誉は、ASPICの活動に対する信頼性を高め、協会の社会的プレゼンスを支える大きな後ろ盾となっています。

AI分野への先進的・積極的な取り組みと今後の新たな事業展開

①AIへのさまざまな取り組み

i. 生成AIの爆発的な進展により、社会や産業の構造そのものが大きく変わろうとする中、ASPICではAI分野におけるさまざまな取り組みを進めています。

世間でAIへの関心が本格的に高まる以前の2017年、弊協会では「ASPICクラウドアワード」にいち早く「AI部門」を新設しました。AI技術の将来性を見据え、クラウド分野における活用を積極的に後押ししてきたことの表れです。

ii. ASPICは、総務省に対して「AIを用いたクラウドサービスに関するガイドブック」および「AIを用いたクラウドサービスの安全・信頼性に係る情報開示指針」を提案しました。これを受けて、総務省は2022年に両文書を公表しています。なお、その作成にあたっては、ASPICが内容の検討などを通じて支援を行いました。

同年には、これらを踏まえた「AIクラウドサービス情報開示認定制度」を創設。これは、AIを活用したクラウドサービスの安全性・信頼性を客観的に評価する仕組みとして、他に例を見ない先進的な制度です。今後は、常に最新のAIの技術動向や社会状況を踏まえながら、本認定制度のさらなる高度化を検討してまいります。さらには、医療・介護分野や自治体分野など、業界特性に応じた展開も視野に入れ、より実効性の高いAIに関する情報開示認定制度を目指します。

iii. その他の具体策として、現在も行っている『AIフロンティア』や『Security Watch』、『クラウドトピックス』等を通じた情報発信も一層強化。最新技術や活用事例、政策動向などをタイムリーに発信し、会員企業および利用者双方にとって有益な情報基盤を整えていきます。

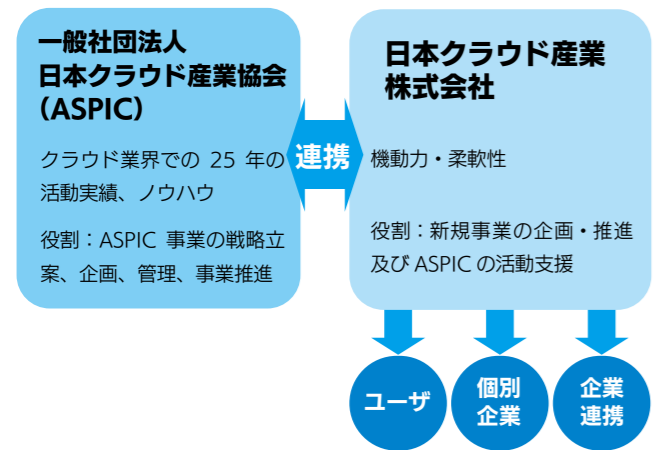
iv. 業界団体としての役割も、より積極的に行う考えです。AIクラウドサービスに関する政策提言を一段と活発化させ、例えばNTTが提唱する「IOWN構想」のような先進的な取り組みも踏まえながら、将来を見据えた提言を発信していきます。

v. さらに、会員企業との連携をこれまで以上に強化し、AIクラウドサービスを軸とした新たなビジネス創出を後押し。同時に、AIがもたらすビジネスの可能性については、ASPIC自らが主体となって独自の調査研究を推進し、その成果を広く共有することで、業界全体の発展につなげていく所存です。

②今後の新たな事業展開 これまでASPICは、2008年に開始した「情報開示認定制度」事業を端緒に、さまざまな事業を展開してきました。介護・医療現場で用いられる国際評価方

式「インターライ方式」のクラウド化事業（2012年）、総務省「IoTサービス創出支援事業」におけるAIとIoTセンサーを組み合わせた認知症対応型サービスの実証・実装事業（2017年・2018年）、そしてクラウドサービス紹介サイト「アスピック」事業（2019年）などです。

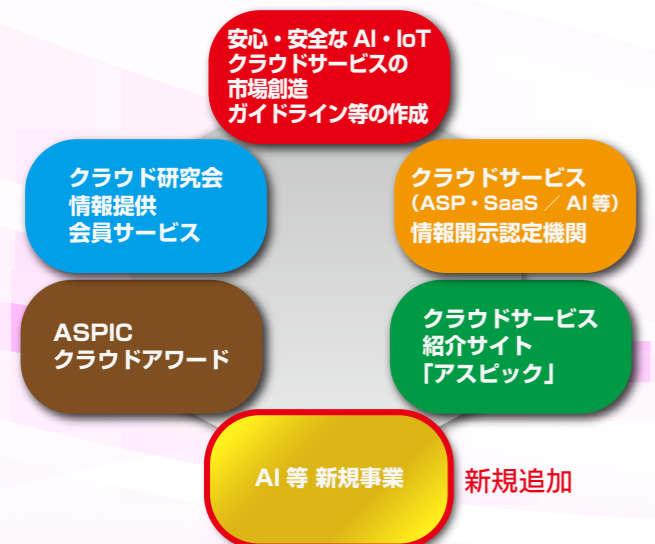
今後は、それらで得られた実績と知見を基盤に、新規事業を積極的に展開し、従来施策を有機的に結び付けながら、活動の一層の発展を目指します。その具体策として、昨年8月に「日本クラウド産業株式会社」を設立しました。新会社では、社団法人と連携しつつ、より機動的かつ柔軟な事業展開を図り、取り組みの拡大を進めていきます。



また昨年11月には、総務省の「デジタル人材の育成ガイドブック」に準拠した「ASPICクラウドサービス検定」を開始しました。実務に直結する幅広い知識を体系的に習得できる内容であり、クラウド人材の育成を力強く後押しするものです。

さらに2026年内には、個人情報保護法等の理解と実践を支援する「ASPICプライバシー認証サービス」や、個人情報保護に関する検定プログラムの開始も予定しています。加えて、AI

ASPIC 活動の6本柱



分野に関する新たな事業についても、できる限り速やかに具体化を図る方針です。

ASPICは上記のような新たな展開を踏まえ、このたび「新規事業」を新たな柱として加え、従来の「5本柱」の枠組みを見直し「6本柱」（左下の図・参照）へと改定することとしました。AI時代においてASPICが果たすべき使命を、より明確に、より実践的に示すための進化であります。

そして、来るべき 30 周年に向けて

ASPICは、25周年を期にロゴマークも刷新いたしました。そして、「クラウドサービスの先進の未来ステージ、ASPIC」というメッセージのもと「第3の創業」に取り組み、来るべき30周年に進んでいきたいと考えています。

爆発的なAIの進展により社会や経済が大きく変化。さらに、高市政権が掲げる「日本成長戦略」の重点17分野の中にAI・半導体、情報通信も入れられており、クラウド業界の果たすべき役割はますます大きくなることでしょう。これからもASPICは会員の皆さまとともに新たな挑戦を続け、クラウド業界全体を支え、盛り上げてまいりたい所存です。

末筆になりますが、これまで私は、ASPIC設立と同時に会長を拝命して以来、NTTデータ、TDCソフト、ユー・エス・イーと所属を変えながらも、会員企業、理事・役員の方々に支えられ、今日まで現職を務めてまいりました。25年間続けてこられたのは、皆さまのおかげに他なりません。

ここに重ねて深謝申し上げますとともに、今後ともASPICへの変わらぬご支援を、どうぞよろしくお願い申し上げます。



はるか彼方の地平より
屹立する生命の強き上昇性
大なる周流描く稜線を
一点に集約修練する円心あり
旭日に見た煌めきの高揚
ASPIC——
高きものへの理想
深きものへの探求
熱きものへの感動
心ふるわせるものへの愛
英知の翼広げて世界へ
価値創造のイノベーション
クラウドサービス先進の
未来ステージ——ASPIC

皆さまより寄せられた ASPIC25 年の活動への思いと評価、未来に向けた提言

「創立25周年記念式典」では、多くの皆さまよりご祝辞を頂戴し、参加者からも率直なご意見をお寄せいただきました。また、前号『クラウドマガジン ASPIC25周年記念号』においても、祝辞ご寄稿や座談会へのご参加など、さまざまなご協力を賜りました。これらを通じ、総務省をはじめとする関係省庁、大学・学術機関、関係団体、会員企業など、のべ64名の皆さまから、のべ280件におよぶ、ASPICとクラウド業界全体に向けた貴重なお言葉を頂戴しております。本誌では、その金言を「ASPIC25年の活動への思い・評価」と「今後のASPICとクラウド業界への提言」の2つのカテゴリーに整理し、それぞれ12項目にまとめてご紹介いたします。

ASPIC25 年の活動への思い・評価

I. 先見性と時代を切り拓くリーダーシップ

1. 「先見の明」への高い評価……ASP の黎明期である1999年の創立当初から現在のクラウド時代を予見し、「所有から利用へ」のビジネスモデル転換をけん引してきた。※【 】内は具体的な言及内容（以下、同様）

【ASPICは、ASPを知る人がほぼ皆無であった時代に、ASP（クラウド）の先進性・可能性・発展性にいち早く着目し、大きな成果を挙げてこられた】

2. 技術変化への即応……ASP から SaaS、クラウド、IoT、そして AI（2017年時点での着目）へと、技術トレンドをいち早く活動に取り込んできた。

【「ASP インダストリーコンソーシアム・ジャパン」として設立後、SaaS、クラウド、IoT を取り込み、さらに AI へと技術領域を広げてきた】

3. 河合会長の強い信念……25年間にわたり「継続は力なり」を体現し、業界団体としてのプレゼンスを確立したリーダーシップに敬服する。

【ASPIC 成長の原動力は、創立以来、陣頭指揮を執ってきた河合会長のリーダーシップと情熱にあることは、衆目の一致するところ】

II. 安心・安全な利用環境の構築

4. ガイドラインの策定……総務省や厚生労働省等と連

携し、実務に即した情報セキュリティや「情報開示指針」を策定してきた。

【セキュリティガイドラインの徹底により、「クラウドサービスの方が安心・安全」という社会通念へのパラダイムシフトを推進した】

5. 「情報開示認定制度」の確立……利用者が安心してクラウドを選択できる仕組みを作り、民間・行政のクラウド導入の礎を築いた。

【中小企業や地方自治体、霞が関におけるクラウドサービスへの移行が進まない中、共通ガイドラインや情報開示指針の策定、認定制度の立ち上げなど、クラウドサービスの普及・展開に貢献した】

6. 実務と政策の橋渡し……現場のリアルな課題を政府の政策形成プロセスへ直接インプットする「貴重な機会」を提供し続けてきた。

【政策担当者にとって、インターネットやクラウドの中で実際に何が起きているかは見えにくい。そのような中、ASPIC との意見交換は現場の『リアル』を理解する貴重な機会となった】

III. 日本のクラウド・DX 推進への寄与

7. クラウド普及への貢献……制度整備や情報発信などを通じて、日本社会におけるクラウド活用の定着と普及を後押しした。

【安心・安全なクラウド環境の構築や最新技術の普及啓発に尽力し、多くの企業や組織がデジタルトランスフォーメーションを加速させる礎を築いてきた】

8. 業界活性化の場……「ASPIC クラウドアワード」を通じ、優れたサービスの顕彰やベンチャー企業の成長支援、マッチングの場を提供してきた。

【クラウドサービス産業をめぐる大きな変革の中で、ASPIC クラウドアワードを開催し、優れたサービスのプロモーションや認知度向上を図ることで、クラウド業界全体を盛り上げてきた】

9. ビジネスモデルの確立……クラウドサービス紹介サイト「アスピック」の運営など、持続可能なビジネスモデルを自ら実践してきた。

【『アスピック』は、利用者、事業者、そして業界全体にとっての「三方良し」を実現する、非常にサステナブルで優れたビジネスモデルである】

IV. 政府・公的機関からの公式な認定

10. 旭日小綬章の叙勲……河合会長の叙勲は、ASPIC

が「わが国の社会経済活動を支える重要な組織である」と政府に認定された証しである。

【受勲は、ASPIC そのものが日本のクラウド分野・業界を代表する存在であると、政府全体として認めた結果である】

11. 行政の補完機能……行政が本来担うべき役割の一部を補完し、官民連携の理想的なモデルを構築している。

【ガイドラインの必要性は認識していたが、省内にノウハウが乏しかった。そのため、ASPIC にお願ひし、さまざまなガイドライン・指針などを作成していただいた】

V. 社会的存在感と未来に向けたポテンシャル

12. 制度設計のロビーイング能力……AI 時代の新たなルール作りを主導できる政治的・社会的影響力により、日本の情報通信産業の明るい未来を築いてほしい。

【クラウドの信頼性・安全性を支えてきた ASPIC の役割は大きく、今後も制度設計や人材育成、企業連携を通じ、業界の持続的成長をけん引する存在としての発展を期待する】

今後の ASPIC とクラウド業界への提言

I. AI による産業構造の変化への対応

1. IT 基盤から「AI ファクトリー」への変貌……ASPIC がこれまでに培った知見を礎に、クラウドを単なるストレージや計算資源から、データと知能を高速に循環させ新たな価値を連続的に生み出す「AI 工場」へと再定義し、産業の核心に据える。

2. 「AI エージェント利用」前提への根本転換……人間が操作するツールとしての SaaS から、AI エージェントが自律的にタスクを遂行することを前提とした API 連携・サービス設計へと根本からアップデートすること。

3. 多分野における「AI クラウド化」の完遂……医療情報のクラウド化実績をモデルケースとし、行政・地方自治体・中小企業のあらゆる業務プロセスを AI 前提で再構築し、人手不足と生産性の壁を突破してほしい。

4. 次世代を担う「AI ビジネス・デザイナー」の育成……単なる技術者ではなく、AI とクラウドを組み合わせる新たなビジネスモデルを構想・デザインできる人材を、業界を挙げて集中的に育成してほしい。

II. 安心・信頼性への取り組み

5. 「情報開示認定制度」の高度化とブランド化……実績を積み重ねてきた「情報開示認定制度」を AI 時代の倫理・安全基準へとアップデートし、信頼をブランド化すると共に、今後も制度設計などを通じ、業界の持続的成長をけん引する存在として、さらなる飛躍を期待する。

6. 「ハード・ソフト一体」のインフラ強靱化……SaaS/ AI のみならず、データセンターや海底ケーブル等の物理インフラも含めた総合的な強靱化を、官民連携で推進すべき。ソフト・ハード双方を包含する ASPIC の取り

組みは、今後まさに必要となる。

7. ポスト量子時代を見据えた先見的防御……量子コンピュータによる暗号解読リスクや生成 AI による攻撃の高度化に対し、ポスト量子暗号 (PQC) への移行準備など、先手管理のガイドラインを普及させるべき。これからの破壊的とも思われる社会変革、産業革新の時代には、「技術革新と社会の安心・安全の両立」を支える ASPIC の取り組みはさらに重要になる。

III. 業界団体としての取り組み

8. 「行政機能補完」の推進……これまで ASPIC は、本来行政が担うべき領域についても、実質的にその一端を担ってきた場面が少なかった。今後も、官民の役割分担を踏まえつつ、可能な領域において引き続きその役割を果たしてほしい。

9. 国際競争に打ち勝つ「日本連合」の早期確立……個社のサービスをバラバラに提供するのではなく、ASPIC をハブとした「塊」となって、「日本発の AI/SaaS モデル」をグローバル市場へ展開するべき。ASPIC には、「仲間づくり」の場であることや、プラットフォームとしての役割にも期待する。

「思い・評価・提言」に対する ASPIC からの回答

創立25周年「御礼・意見交換の会」のご参加者、ならびに前号『ASPICクラウドマガジン ASPIC25周年記念号』にご寄稿いただきました皆さまにおかれましては、ASPICのこれまでの活動に対する思いやご評価、今後のASPICならびにクラウド業界全体に向けた多くのご意見・ご提言をお寄せいただき、心より感謝申し上げます。本会は、関係者の皆さまへ直接、切なる感謝の念をお伝えするとともに、忌憚のないご意見を賜りたく開催したものであり、拝受した幾多の珠玉のお言葉は、いずれもASPICの次の歩みを考える上での確かな指針となる、何ものにも代えがたい貴重な財産となりました。

25周年という節目を迎えたばかりのASPICですが、実は30周年まで残りわずか3年であり、それに向けて、新たなビジネスモデルの構築に挑んでいく必要があると考えております。とりわけAI関連事業やプラットフォームへの取り組みを本格化させ、今回いただいたご提言を踏まえた新たな事業展開を進める方針です。

また、安全・信頼性の確保については、今後、AI認定制度を中心とした情報開示認定制度の高度化を行い、「AI時代のクラウドサービス」の安心・安全のさらなる向上を図ります。

この先もASPICは、総務省をはじめとする官公庁、関係機関等のご指導を仰ぎつつ、日本のクラウド業界の国際競争力強化と、事業者と利用者の接点となる団体としての役割を一層深化させ、皆さまからのご提言を最大限に活かしながら、弊協会の第三の創業期を切り拓いていく所存です。



ASPIC25年の成果

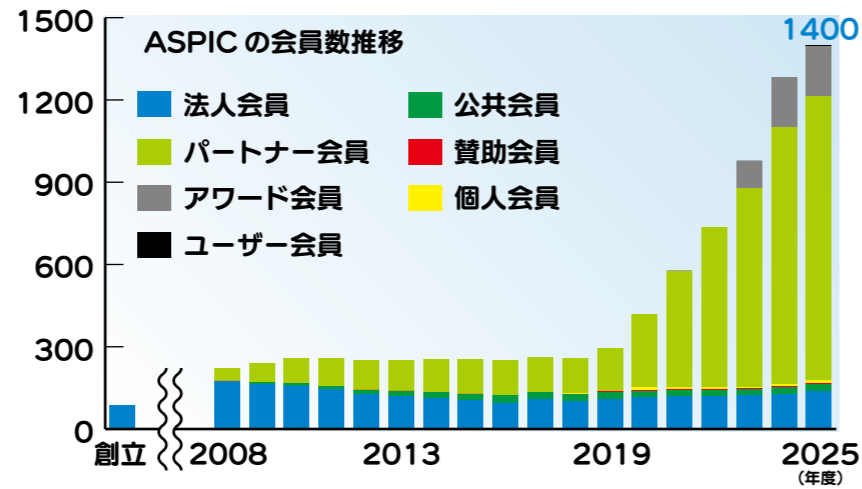
1999年創立

1999年11月に任意団体「ASPインダストリ・コンソーシアム・ジャパン」として歩みをはじめたASPIC。創立からの25年間でIT業界のトレンドは我々の想像を超えるスピードで目まぐるしく変化してきましたが、その様な中でもASPICは一貫して業界の発展と日本のICT政策推進に貢献し続けてきました。

会員数

1,400社

(25年間で)

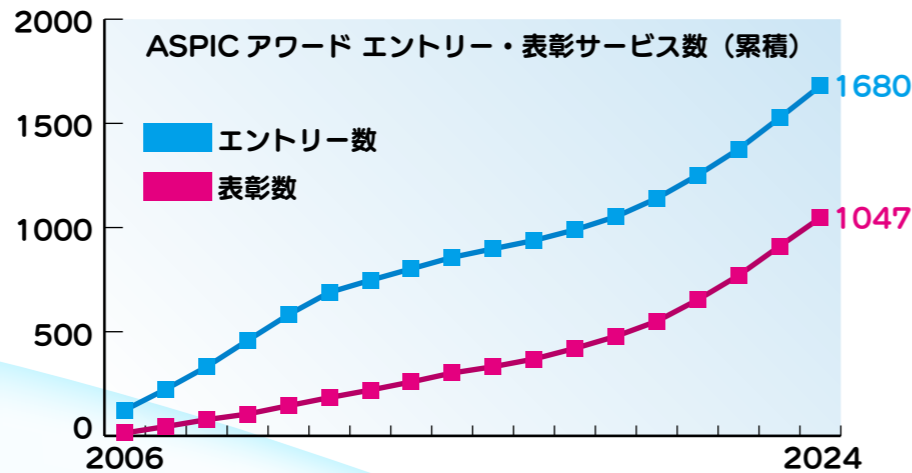


アワード表彰数

1,047

サービス

(18年間で)

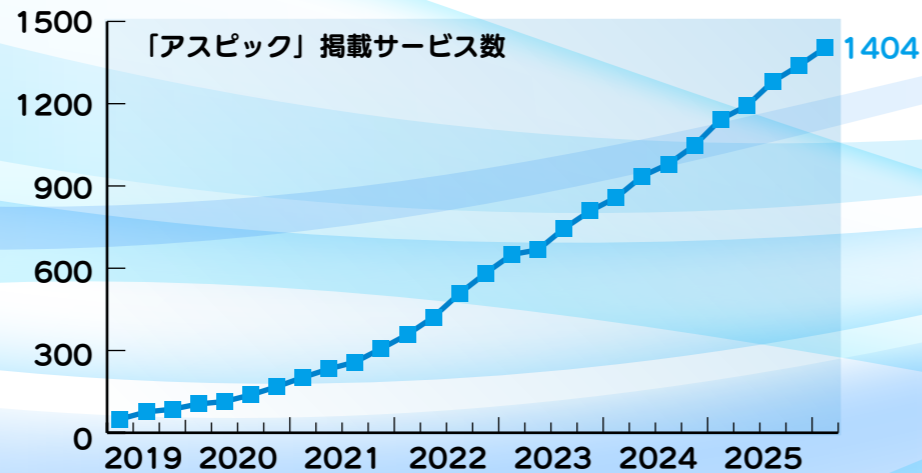


「アスピック」掲載数

1,404

サービス

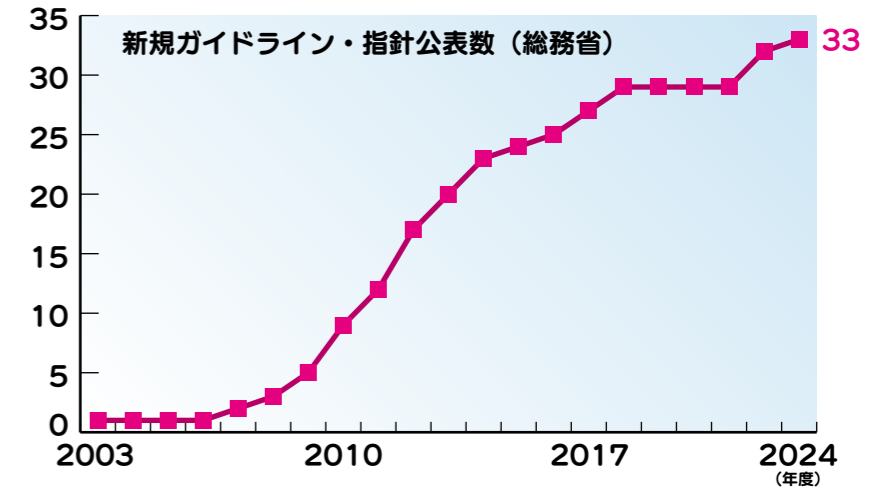
(7年間で)



ガイドラインの作成支援

33

(22年間で)

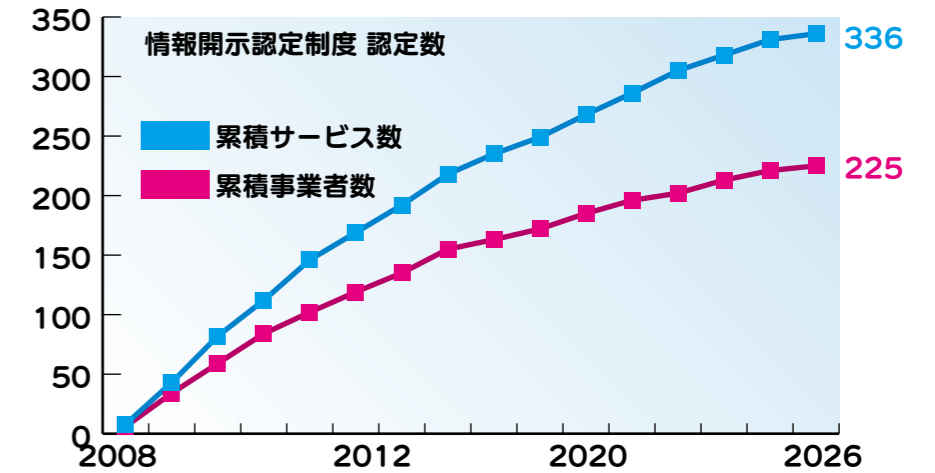


情報開示認定制度

336

サービス認定

(18年間で)



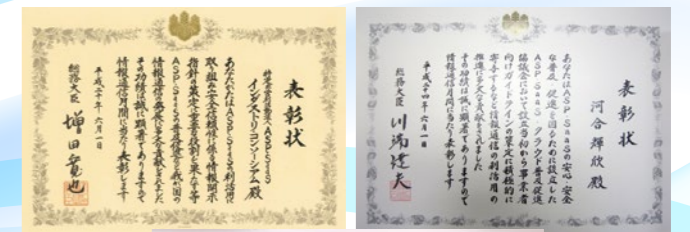
事業規模

5億円

突破



総務大臣表彰 旭日小綬章 受勲



第1期 1999年創立～

第2期 2007年～

第3期 2017年～

第4期 2023年～

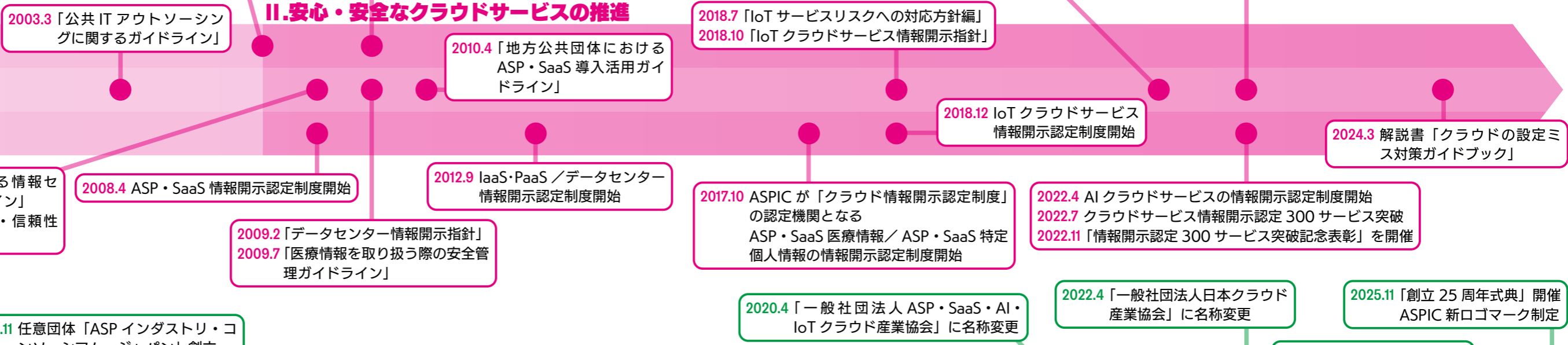
I. ASP・SaaSクラウドの普及促進と市場拡大



- (1) ASP・SaaSクラウド普及促進協議会の推進
- (2) セキュリティガイドライン・情報開示指針の総務省公表 (作成支援)
- (3) 情報開示指針を基に情報開示認定制度の立ち上げ

2008.1 「ASP・SaaS における情報セキュリティガイドライン」
2007.11 「ASP・SaaS の安全・信頼性に係る情報開示指針」

II. 安心・安全なクラウドサービスの推進



- (1) 社団法人化と名称変更
- (2) 会員の組織強化、事業基盤の強化
- (3) 政府等への提言
- (4) 総務大臣表彰、旭日小綬章受勲

1999.11 任意団体「ASP インダストリ・コンソーシアム・ジャパン」創立

2002.2 NPO の認証取得

2010.2 「活動の 5 本柱」制定

2008.6 総務省情報通信審議会「ICT による生産性向上に関する検討委員会」に河合会長参画

2008.6 ASPIC が「情報通信月間・総務大臣表彰」を受賞

2009.11 総務省ユビキタス特区事業「長崎県『あじさいネットワーク』」開始

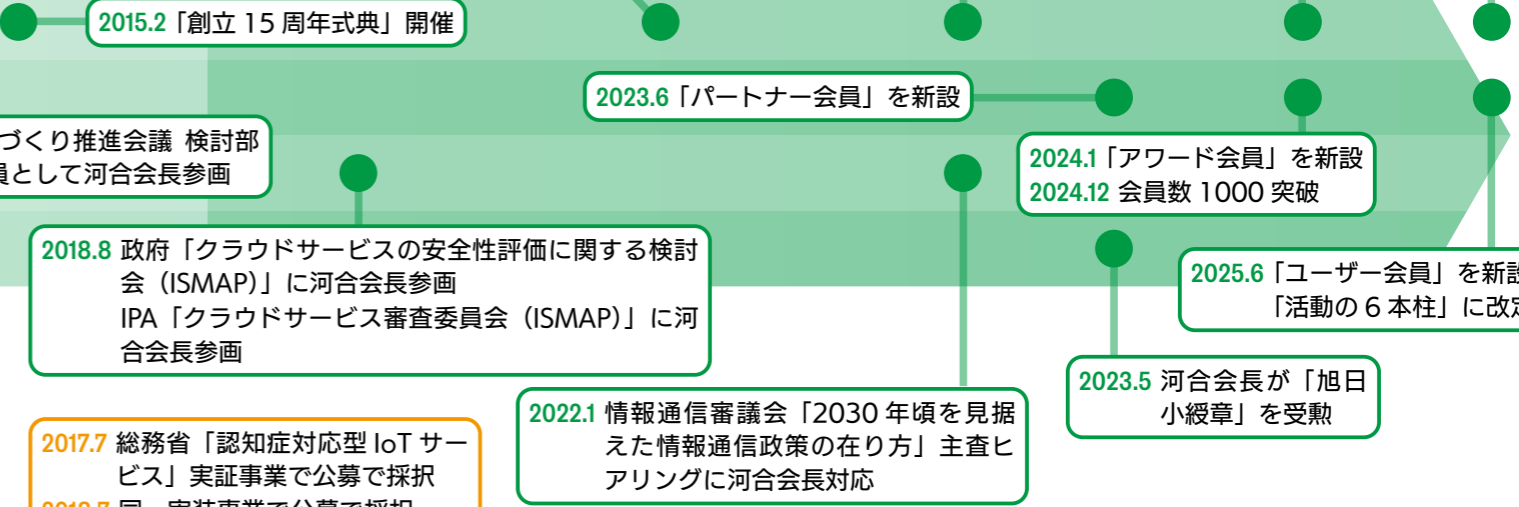
2012.2 「ミッション・ビジョン」制定

2012.11 「ICT 街づくり推進会議 検討部会」委員として河合会長参画

2012.6 河合会長が「情報通信月間・総務大臣表彰」を受賞

2012.4 インターライ方式クラウドサービス提供開始

III. ASPICの組織強化と社会的なプレゼンスの向上への取組み



- (1) 実証・実装事業並びにクラウドサービス事業の展開
- (2) 新たな事業の創出等

2008 情報開示認定事業開始

2019.4 「アスピック」事業開始

IV. 今後の新たな事業展開

2025.8 新会社「日本クラウド産業株式会社」設立
2025.11 「ASPIC クラウドサービス検定」事業開始
2026～「ASPIC プライバシー認証・研修・検定サービス」事業開始

一般社団法人 日本クラウド産業協会 創立25周年のご挨拶と
記念講演会及び御礼・意見交換の会のご招待

令和7年8月吉日
一般社団法人 日本クラウド産業協会 (ASPIC)
会長 河合輝欣

謹啓 時下 皆様には益々ご清栄のこととお慶び申し上げます
お陰様で、弊協会は1999年創立以来、25周年の佳節を迎えることができました。
これも偏に、理事・役員・会員の皆様方をはじめ、総務省、関係省庁、大学・学術機関、関係
団体等、多くの関係者のご指導並びにご支援を賜りましたことに、厚く御礼申し上げます。
創立以来「ASP・SaaS・クラウドの普及促進と市場拡大」、「安心・安全なクラウドサービスの
の推進」及び「ASPICの組織強化と社会的なプレゼンスの向上」を目標としてクラウド業界
の発展に取り組んでまいりました。

- *会員数 (法人、パートナー、アワード会員、ユーザ会員等) **1313社**
- *クラウドアワードの表彰累積数 (最高位総務大臣賞) (18年間) **1047サービス**
- *クラウドサービス紹介サイト「アスピック」(2019年サービス開始)
掲載クラウドサービス **1264サービス**
- *クラウド、AI、セキュリティ等の情報提供、研究会等開催 (年間) **200回**
- *総務省と連携した普及促進協議会で、情報セキュリティガイドライン等の作成・支援数
(総務省公表18年間) **33ガイドライン等**
- *認定機関としてクラウドサービスの情報開示認定数 (16年間) **332サービス**
- *社団法人化と法人名称の変更により、**一般社団法人 日本クラウド産業協会**としました。

この間の活動に対して、総務省のご推薦により

- 2008年 ASPICが団体として、「総務大臣表彰」受賞しました。
- 2012年 ASPIC会長として、河合輝欣が「総務大臣表彰」受賞しました。
- 2023年 ASPIC会長として、河合輝欣が「旭日小綬章」受章しました。

今後は、爆発的に進展するAI時代の変化の中で、従来の事業の充実・強化を図ると共に
新たな事業の展開 (新会社の設立・運営、クラウドサービスの検定事業、AI関連事業等) を行い、
国際競争力のあるクラウド業界の発展に貢献し、より存在感のある協会を目指していく所存で
す。

皆様方の大所高所からの忌憚のないご意見、ご提言を賜りたいと存じます。

つきましては別添のとおり 創立25周年を記念して講演会及び御礼・意見交換の会を催した
いと存じますので ご多忙のところ誠に恐縮ではございますが 何卒ご臨席賜りますようご招
待申し上げます。

謹白

別 添

記念講演会及び御礼・意見交換の会

1. 日 時 令和7年11月19日 (水曜日) 14時~19時半
2. 場 所 経団連会館2階 (経団連ホール・国際会議場)
東京都千代田区大手町1-3-2 電話03-6741-0222
3. 記念講演 14時~17時15分 (経団連ホール)
 - (1) ASPIC 会長挨拶 河合 輝欣
 - (2) 来賓挨拶 総務副大臣 (予定)
 - (3) 講演1 株式会社 Preferred Networks (PFN) 共同創業者
代表取締役 岡野原 大輔 様
 - (4) 講演2 NTT 株式会社チーフエグゼクティブフェロー
(前代表取締役副社長) 川添 雄彦 様
 - (5) 講演3 総務省 大臣官房総括審議官 (情報通信担当) 藤田 清太郎 様
4. 御礼・意見交換の会 17時半~19時半 (国際会議場)
 - (1) ASPIC 会長挨拶 河合 輝欣
 - (2) 来賓挨拶
 - (3) 御礼・意見交換の会

御礼・意見交換の会



「御礼・意見交換の会」には、ASPICの活動にご指導・ご支援をいただいていた総務省をはじめ、関係省庁、大学・学術機関、関係団体の皆さま、ならびに理事・役員・会員の方々など、約400名が出席。この会は、ASPICが皆さまに日頃の感謝をお伝えするとともに、すべての参加者が直接意見を交わせる場として設けたものです。

冒頭の会長挨拶では、まず当日に行われた第1部および第2部の内容について報告があり、ご祝辞を賜った方々や記念講演の登壇者、ならびに功労表彰者の皆さまへの謝意が表されました。

続いて、ASPICの「3大目標」である「ASP・SaaS・クラウドの普及促進と市場拡大」「安心・安全なクラウドサービスの推進」、そして「ASPICの組織強化と社会的プレゼンスの向上」を軸に、設立以来25年にわたって積み重ねてきた成果を説明。同時に、大変お世話になった総務省をはじめとする関係各位へ、心からの感謝の言葉が伝えられています。

その後は、ご来賓として、長年にわたりASPICの活動

に深く関わってこられた産官学の関係者10名よりご祝辞を頂戴しました。ASPICの25年にわたる歩みや、その成果、さらには今後への期待について語られた言葉はいずれも温かく示唆に富んだものであり、会場が大きな拍手に包まれる場面が幾度も見られました。

また、時間の都合により、全員からご祝辞を頂戴することは叶いませんでしたが、総務省の現職幹部やOB、関連団体の皆さまにも多数ご参加いただき、ASPICの活動にご賛同くださる関係者の層が、着実に広がっていることを改めて感じさせる場となりました。

続く立食形式のパーティーは、分野を超えた交流と意見交換をする場として設定。クラウド産業の将来像や国際競争力の強化、さらにはASPICの新たな事業展開などをテーマに、参加者同士による活発な議論が交わされるなど、会場は終始熱気に包まれていました。

ASPICとしてもこの会は、25年にわたる歩みとその成果を、参加者とあらためて共有できただけでなく、業界団体としてASPICに寄せらる期待の大きさを改めて受け止める、大変意義深い機会となりました。

一般社団法人 日本クラウド産業協会 会長

河合輝欣

TERUYOSHI KAWAI

ASPIC がここまで歩んでくることができたのは 関係各位の長年にわたるご指導、ご支援のたまものです

本日この場では、ASPIC が掲げてきた「3大目標」を中心に、これまでの取り組みと成果を、改めてご紹介させていただきたいと思えます。どうか「ビジュアル年表」(P12～13)と併せてお聞きください。

私ども ASPIC は、「ASP・SaaS・クラウドの普及促進と市場拡大」「安心・安全なクラウドサービスの推進」、そして「ASPIC の組織強化と社会的プレゼンスの向上」という3つの目標を軸に、活動を続けてまいりました。

まず、「ASP・SaaS・クラウドの普及促進と市場拡大」についてです。18年間にわたり実施してきた ASPIC クラウドアワードでは、総務大臣賞を含め、延べ1047のサービスを表彰してまいりました。また、2019年にスタートしたクラウドサービス紹介サイト「アスピック」は、現在、1300超のサービスを掲載。利用者と、サービスを提供する事業者の橋渡しを行ってきました。さらに、クラウドビジネス研究会は年間25回、累計で503回開催。社会に向けた情報発信も年間175回に及んでいます。

次に、「安心・安全なクラウドサービスの推進」です。総務省と連携して設立した ASP・SaaS 普及促進協議会、データセンター促進協議会を通じ、18年間で33本に及ぶセキュリティガイドラインや情報開示指針の策定を支援いたしました。これらを基盤とした「情報開示認定制度」では、これまでに332のサービスを認定しており、クラウドサービスの信頼性向上に一定の貢献ができたものと受け止めています。3つ目は、「ASPIC の組織強化と社会的プレゼンスの向上」です。協会名称の変更や会員制度の再編を進めた結果、現在では法人会員、パートナー会員、アワード会員などを含め、

会員数は1300社を超えるまでに拡大しました。

現在は、紹介サイト「アスピック」の進展などによって団体の事業基盤も強化され、年間の収入規模は5億円を超えるまでにになりました。

こうした活動が評価され、2008年には ASPIC として総務大臣表彰を、2012年には私個人が同賞を受賞。そして2023年には、ASPIC 会長として私個人が旭日小綬章叙勲の栄誉を賜りました。ここに改めて、叙勲に関わってくださった、総務省をはじめとする関係各位に、心から御礼申し上げます。

ASPIC は、事業展開においても、各種認定事業をはじめ、インターライアセスメント事業、前述の「アスピック」に関連する事業、さらには総務省の実証事業への応募・参画など、多岐にわたる前例を手がけてきました。

これらを通じて培ってきた経験と知見を生かし、今後は新規の事業展開を「新たな柱」と位置づけ、従来の施策と連動させつつ、さらに発展させていきたいと考えております。

また、日本クラウド産業株式会社を設立し、社団法人としての ASPIC と株式会社が一体となって、爆発的に進展する AI の時代に向け、より実践的な事業支援にも取り組んでまいります。

最後になりますが、クラウド業界全体、そして弊協会の発展に取り組む中で、ASPIC は業界において一定の存在感を持つ団体へと成長することができました。しかし、ここまで歩んでくることができたのは、ひとえに本日も集まっていた、理事・役員・会員の皆さま、そして総務省をはじめとする関係各位の長年にわたるご指導、ご支援のたまものです。この場をお借りして、改めて心より感謝申し上げます。

参議院議員

いんどう周作

SHUSAKU INDOH

1992年、東大法学部卒業後、郵政省(当時)に入省。在フランス日本国大使館一等書記官、総務大臣秘書官、総合通信基盤局事業政策課市場評価企画官、国土交通省道路局路政課道路利用調整室長、総務省情報流通行政局情報流通振興課長、デジタル庁国民向けサービスグループ審議員などを経て、2025年7月に参議院議員選挙にて初当選。

生成 AI が誕生する以前から今日の AI 時代の到来を見通していた 河合会長の先見性には感服しております

ASPIC 創立 25 周年、誠にありがとうございます。本日はこのような記念すべき場にお招きいただき、心より感謝申し上げます。

先ほど河合会長から、ASPIC の「プレゼンス向上」についてお話がありましたが、私自身もその歩みを長く拝見してきました。私が総務省に在籍していた頃、ちょうど ASPIC の第3期が始まる時期だったと記憶していますが、その際、河合会長から「AI を ASPIC の事業に取り入れたい」というお話を伺いました。その頃から、河合会長とは継続的に付き合いをさせていただいております。

当時は、現在のように生成 AI や AI エージェントが注目される時代ではなく、AI という言葉自体が今ほど一般的ではありませんでした。それだけに、ASPIC の存在感は今、相当高まっているのではないかと感じ、実は本日、この会に出席する前に生成 AI に「ASPIC とは何か?」と尋ねてみました。

返ってきた答えは2つありました。1つは、フランス料理の前菜でゼリー状の料理、いわゆる日本で言う「煮ごごり」にあたる「アスピック」。そしてもう1つが、「IT サービス比較プラットフォーム」という回答で、まさにカタカナ「アスピック」の活動を指すものでした。生成 AI が ASPIC の存在を正しく認識していることに、25年にわたる河合会長のご努力の成果を感じ、大変感慨深く思った次第です。

すでに多くの場で語られているとおり、生成 AI の活用は個人・企業を問わず急速に広がっています。一方で、国際的に見れば、日本の AI 活用はまだ十分とは言えない状況にあります。ただ、現在策定が進められている総合経済対策を見

ても、情報通信分野で最も多く使われているアルファベットは「AI」です。これまで DX や GX が注目されてきましたが、今回は AI が中心となっており、まさに本格的な AI の時代が到来しつつあると感じています。その意味で、2017年という早い段階で AI の重要性を見通していた河合会長の先見性には、改めて感服しています。

現在、AI は経済安全保障の観点からも重要なテーマとなっており、ソフトウェアだけでなく、ハードウェアの整備も不可欠です。データセンターや海底ケーブルを含め、情報通信インフラ全体として AI を支える体制を強化していく必要があるのです。

そうした中で、ASPIC が取り組んでこられた事業は、ソフトとハードの双方を包含しており、これからの時代にまさに必要とされるものだと考えています。今後も、河合会長をはじめ関係者の皆さまには、情報通信分野を通じて日本の経済安全保障を高めていく役割を担っていただくことを、大いに期待しております。

結びにあたり、ASPIC のこれまでの功績に深く敬意を表するとともに、今後のさらなる発展、そして本日までご参集の皆さまのご健康とご多幸を心よりお祈り申し上げ、私からのご挨拶とさせていただきます。

ASPIC 創立 25 周年、本当におめでとうございます。



犬童様には、総務省ご在任中、生成 AI が出現前に、AI クラウドサービスのガイドブック、情報開示指針の策定公表、AI クラウドサービス認定制度の立ち上げのご支援を頂きました

総務省 総合通信基盤局長

湯本 博信

HIRONOBU YUMOTO

1990年4月郵政省（現総務省）に入省。在中国日本国大使館一等書記官、総務大臣秘書官、総合通信基盤局電気通信事業部消費者行政課長などを経て、2020年7月に総務省 大臣官房審議官（情報流通行政局担当）、2022年1月にデジタル庁統括官付審議官（戦略・組織グループ特命担当次長）を歴任し、30余年にわたり情報通信行政に従事。2023年7月より現職。

欧米のプラットフォーマーが勢いを増す中、わが国のDXを推進していくためには ASPIC の活動が大変重要です

まずは、ASPIC 創立 25 周年、誠におめでとうございます。そしてこのような盛大な会にお招きいただき、改めて厚く御礼申し上げます。

今日は、私よりもはるかに諸先輩方、そうそうたる皆さまがこの後ご挨拶を控えておられますので、私からはごく簡単にお話しさせていただきたいと思っております。

ASPIC につきましては、先ほど河合会長からもお話がありました。現在 1359 社もの会員を擁しておられるとのことで、まさにクラウド分野において、わが国を代表する、規模・実力ともに有数の産業団体であると改めて感じております。

これはひとえに、河合会長をはじめとする ASPIC 事務局の皆さま、そして会員各社の皆さまの長年にわたるご尽力のたまものであり、本当に素晴らしい成果だと思っております。

また、先ほど犬童先生からもお話がありました。ASPIC がここまで発展してきた背景には、やはり時代の先を読む力、先見性があったのだと強く感じます。

もともと「ASP インダストリーコンソーシアム・ジャパン」として設立され、その後、SaaS を取り込み、クラウドを取り込み、IoT を取り込み、さらに AI へと領域を広げてこられました。しかも、その間、一貫して「ASPIC」という名称を変えずに活動を続けてこられた。

これは、最初のネーミングがいかに優れていたか、ということでもあるのだと思います。正直なところ、これ以上どう名前を広げるのだろうかという個人的に思っていたのですが、そこを「日本クラウド産業協会」という形にまとめ上げられた。まことに見事だと感じております。

言うまでもありませんが、わが国は長らく「デジタル赤

字」が指摘されており、特に米国を中心とした海外プラットフォーマーが存在感を増す中で、日本の DX、デジタル化をどう推進していくかは大きな課題です。

その中で、ASPIC のような団体が果たしてきた役割は極めて大きく、これまで行政が本来担うべき部分を、肩代わりしていただいた場面も少なくなかったと感じております。

今後も引き続き、私どもとしても精いっぱい支援をさせていただきたいと思っておりますし、ASPIC の活動を通じて、会員企業の皆さまがより元気になり、それが日本経済、さらには日本社会全体の発展につながっていくことを大いに期待しております。

末尾になりますが、本日お集まりの皆さまのますますのご健勝と、ASPIC の今後ますますのご発展を心より祈念いたしまして、私からのご挨拶とさせていただきます。本日は誠におめでとうございます。



湯本様には、長年にわたり ASPIC 活動をご指導いただき、特に総括審議官在任中には、河合会長の叙勲にもご尽力賜りました。さらに総合通信基盤局ご着任後も、クラウドの現状と今後についてご指導をいただいております

東洋大学教授
元・総務省 総務審議官

阪本 泰男

YASUO SAKAMOTO

1980年、郵政省入省。2008年、総務省 大臣官房 審議官（情報流通行政局担当）。2009年、内閣官房 情報セキュリティセンター 副センター長。2011年、総務省 大臣官房 審議官（情報流通行政局担当）。2013年、総務省 情報通信国際戦略局長。2014年、総務省 総務審議官（国際担当）。2024年、東洋大学情報連携学部教授。

25 年間にわたる河合会長のリーダーシップと ASPIC の皆さまのたゆまぬ努力が、現在のクラウド全盛の礎になっています

ASPIC 創立 25 周年、誠におめでとうございます。心より喜び申し上げます。

先ほど来、河合会長からもお話がありましたが、ASPIC は 1999 年に創立されました。当時は、まさに ASP の黎明期であり、まだその概念自体が十分に理解されていなかった時代です。その後、長年にわたり ASP・SaaS の普及に尽力されてきたわけですが、今振り返ってみると、先ほど湯本局長からもお話があったように、本当にものすごい先見の明があった取り組みだったと感じています。その慧眼には、心から敬意を表したいと思っております。

私自身も当初から関わらせていただいておりますが、正直なところ、最初は ASP とは何なのか、十分に理解できていなかったというのが実態です。また、総務省の委託事業なども活用しながら、多くのガイドラインを策定していただきましたが、その過程ではさまざまご苦勞もおかけしたことと思います。

現在、企業におけるクラウドサービスの利用率を見ますと、2014 年時点では約 40% でしたが、2024 年には約 80% に達しています。この 10 年間で実に倍増したことになります。今や、クラウドなしではビジネスが成り立たない時代です。その基盤を築いてこられたのが、まさに ASPIC の 25 年にわたる活動だったのではないかと感じています。

河合会長の 25 年間に及ぶリーダーシップ、そして ASPIC の皆さまの不断の努力が、こうした成果につながってきたのだと思います。「継続は力なり」という言葉を、まさに実感させていただいているところです。

本日は多くの皆さまがご参加されていますが、おそらく

ASPIC に対して、「これからももっと頑張れ！」という期待が込められているのではないかと思います。そこで最後に、意見交換会という場をお借りして、一つだけ要望を申し上げたいと思っております。

ご案内のとおり、AI は急速に進化していますが、残念ながら現時点では米国や中国が先行しており、日本は後れを取っている状況です。これを何としても挽回したいと考えています。そのためには、25 年間にわたって培われてきた ASPIC のノウハウと、ここにお集まりの企業の皆さまの英知を結集し、連携をさらに強化していくことが不可欠です。そして、日本発の AI・SaaS モデルを、ぜひ早急に構築していただきたい。これは私自身の強い希望でもあります。

最後になりますが、ASPIC のますますのご発展を心よりお祈り申し上げます。本日はありがとうございました。



阪本様は総務省ご在任中、「ASP・SaaS クラウド普及促進協議会」の立ち上げ、運営や ASP・SaaS 情報セキュリティ対策ガイドラインの作成等、ASPIC 草創期からご指導ご支援を賜り、今日の ASPIC 活動の基盤を築いていただきました

一般財団法人 マルチメディア振興センター 理事長
元・総務事務次官

桜井 俊
SHUN SAKURAI

1977年、東大法学部卒業後、郵政省（当時）に入省。総務省情報通信政策局総合政策課長、総務大臣官房参事官、総合通信基盤局長、情報通信国際戦略局長、総務審議官（郵政・通信担当）、総務事務次官などを歴任。退官後は株式会社電通グループ代表取締役副社長執行役員などを経て、2022年から一般財団法人マルチメディア振興センター理事長。

これからも引き続き、安心安全な情報通信社会のために ご尽力いただくことを期待いたしております

ASPIC 創立 25 周年の式典が、このように盛大に開催されますことを、心よりお喜び申し上げます。

会長をはじめ、来賓の皆さまは大変簡潔にご挨拶をされておりまして、「私もできるだけ短く」と思っておりますが、実は 15 周年の際にもご挨拶の機会を頂戴しております。そのときは、「ASPIC といえば卓上カレンダーのファンだ」というお話をさせていただきました。最近あのカレンダーを見かけなくなりましたので、どうなったのかなと、少し気になっているところであります（笑）。

冗談はさておき、ASPIC は 1999 年に任意団体として設立されたと同っております。その 1 年前の 1998 年は、NTT が持株会社体制の下で機能分離を行った年であり、電話分野における競争政策のひとつの集大成となった時期でした。その後、2000 年には e-Japan 戦略が打ち出され、当時は韓国が ADSL でブロードバンドを急速に普及させる一方、日本は遅れているのではないかと、といった議論がなされていたことを思い出します。そうした、電話からインターネット、ブロードバンドへと大きく移行していく時代の節目に、この「ASPIC」というしゃれた名前の組織が立ち上がったということは、やはり先見性があったのだと、改めて感じております。

先ほど司会の方からもご紹介がありましたが、私が現在おります一般財団法人マルチメディア振興センター（FMMC）では、現在 ASPIC の主要な事業の一つとなっている情報開示認定制度を手がけておりました。2008 年の開始当時から ASPIC さんと一緒に取り組んでいたのですが、2017 年にその事業を ASPIC さんに一元化いたしました。今振り返りま

すと、少々もったいないことをしたかな、という思いも正直なところございます。

いずれにいたしましても、河合会長からご提示いただいた資料を拝見しますと、今後の AI については、一つはロボットとの連携が進むこと、もう一つは軍事利用が進展すること、そして AI が個人に寄り添うパーソナル AI へと進化していくことが示されていました。仕事の相談相手にもなり、悩みの相談相手にもなる、そうした存在になっていくというお話でした。

そういえば先日、「岡山県の女性が、パソコンの中のパーソナル AI に恋をして結婚式を挙げた」というニュースを目にしました。こうした話を含めて考えますと、AI の進展とともに、社会におけるリスクもますます高まっていくのだろうと感じております。経済活動のみならず、社会活動や日常生活においても、ひとたび問題が起これば、その影響は非常に大きなものになりかねません。

だからこそ、ASPIC の皆さまには、これからも「安心・安全な情報通信社会」の実現に向けて、引き続きご尽力いただくことを心から期待しております。

本日は、誠におめでとうございます。

桜井様には、総務省ご在任中、長きにわたり ASPIC の草創期から、ASP・SaaS の普及促進、安心安全なクラウドサービスの推進に対して、高い視点からご指導を頂き、ASPIC の基盤構築にご支援を頂きました

国立研究開発法人 情報通信研究機構 理事長
慶應義塾大学名誉教授

徳田 英幸
HIDEYUKI TOKUDA

計算機科学者、工学者、Ph.D. in Computer Science。国立研究開発法人情報通信研究機構理事長。カーネギーメロン大学計算機科学部研究准教授、慶應義塾大学環境情報学部教授、慶應義塾大学常任理事、環境情報学部長、大学院政策・メディア研究科委員長などを経て、慶應義塾大学名誉教授。

ASPIC の不断の努力が利用者の信頼と 日本のクラウド市場の健全な発展を支える大きな力となりました

日本クラウド産業協会が 25 周年を迎えられましたこと、心よりお祝い申し上げます。改めて、河合会長をはじめとする ASPIC を支えてこられた関係者の皆様に、心から敬意と感謝の意を表す次第です。

私は、前職の慶應義塾大学時代、ASPIC が総務省と連携して設立された当初から「ASP・SaaS・クラウド普及促進協議会」に協議会会長として、クラウドサービスの情報セキュリティ対策ガイドラインの作成などに参加し、安心・安全なクラウドサービスの普及促進に協力させていただきました。この四半世紀を ASPIC の活動とともに振り返れば、クラウドは単なる IT インフラの枠を超え、社会や産業の変革を支える基盤として大きく発展しております。

ASPIC 設立当初は「所有から利用へ」といったビジネスモデルへの移行が始まった頃でした。当初、中小企業や地方自治体、霞が関におけるクラウドサービスへの移行がなかなか進まない中、サービス提供企業に対する共通ガイドライン、情報開示指針、認定制度など、クラウドサービスの普及・展開に貢献された功績は顕著なものであったと改めて感謝申し上げます。企業や行政の業務改革、スタートアップの加速、さらには私たちひとりひとりの生活様式の変革にまで大きく寄与されてきました。

今では「クラウド・バイ・デフォルト」であり、クラウドサービスのない世界を想像することができません。これらの歩みを業界横断的にまとめ、標準化や利用ガイドライン、セキュリティやプライバシーの確保といった課題に率先して取り組んでこられたのが日本クラウド産業協会であります。皆様の不断の努力は、日本のクラウド市場の健全な発展を支え、

利用者の信頼を築き上げる大きな力となりました。

今、私たちは、生成 AI の普及という新たな時代を迎えています。現在のクラウドは、社会や産業を支える IT 基盤として、膨大なデータを安全に蓄積・処理し、必要な時に必要なリソースを提供する役割を担っています。今後はこの基盤がさらに進化し、AI の学習・推論を大規模かつ持続可能な形で支える AI ファクトリーへと変貌していくと思います。

クラウドは、データと計算資源を結集し、新たな価値やサービスを生み出す中心的な場として、次の 10 年においても社会や産業の核心を牽引する存在であり続けるでしょう。日本クラウド産業協会がこれまで培ってこられた経験と知見を礎に、次世代のクラウド AI サービスのあるべき姿を世界に示していかれることを心から期待しております。

結びに、25 周年を迎えられた貴協会のさらなるご発展と会員各位のご健勝を祈念申し上げ、祝辞といたします。（当日は海外出張のため、ご出席いただくことがかなわず、ビデオメッセージをいただきました）

徳田様には「ASP・SaaS クラウド普及促進協議会」の会長として、クラウドサービスの情報セキュリティ対策ガイドライン等の作成に、ご指導、ご支援を賜りました

一般財団法人
医療情報システム開発センター 理事長

山本 隆一
RYUICHI YAMAMOTO

1952年、大阪市生まれ。大阪医科大学を卒業後、大阪医科大学第1内科、聖路加国際病院などを経て大阪医科大学病院医療情報部助教授。2003年より東京大学大学院情報学環准教授、2012年より一般財団法人医療情報システム開発センター理事長、2013年より東京大学医学系研究科医療経営政策学講座特任准教授、2016年より自治医科大学客員教授。

ASPICの多大なご協力のおかげで 2010年の“医療情報のクラウド化”が実現しました

ASPIC 創立 25 周年、誠にありがとうございます。

現在、厚生労働省の施策では、診療所や中小規模病院がシステムを更新する際には、クラウドの活用が求められるようになってきました。しかし、こうした運用が制度として可能になったのは、実は2010年のことでした。それ以前は、医療機関が医療情報を施設の外に出すこと自体が認められていなかったのです。ASPICが誕生された1999年には、厚生労働省から「電子保存の容認通知」が出されました。当時の厚生省は「局あって省なし」と言われるほど内部調整が難しい状況でしたが、三局庁連名によるこの通知によって、医療の情報化が不可欠であるとの認識が示され、電子カルテをはじめ、電子的に生成した医療情報を紙に出力せず保存することが認められました。ただし一方で、情報を医療機関の外に出すことは認められず、サーバは必ず院内に設置することが条件とされていました。

病院というのは、例えるなら教会のようなもので、誰でも出入りができます。診療所に至っては、ほとんど一般の住宅と変わりません。そうした環境で重要なデータベースを院内に置き、完全に守り切ることは、当時から現実的ではないと感じていました。そこで2001年に外部保存の容認を目指しましたが、関係団体の強い反対やさまざまな事件の影響もあり、提案すらできませんでした。

その後も2002年、2007年と取り組みを続けましたが、いずれも反対は強く、医療情報を医療機関の外に出すことは認められませんでした。一時は自治体であればよい、あるいは医療機関が預かるのであればよい、といった議論もありましたが、民間事業者は認めないという状況が続いていました。

このままでは前に進まないと考え、経済産業省に協力をお願いしました。当時、厚生労働省には医療機関向けのガイドラインはありましたが、それと対になる、事業者が守るべきガイドラインが存在していなかったのです。そこで経済産業省、総務省の協力を得て、事業者向けガイドラインの策定を進めました。私が委員長を務める形にはなりませんが、実際にはASPICの皆さまに多大なご協力をいただき、何とかまとめ上げることができたのです。

医療機関向けと事業者向け、表裏一体のガイドラインが整ったことで、「これなら民間に委託しても安全だ」と説明を重ね、ようやく2010年に、一定の安全対策を講じた民間事業者への委託が認められました。これにより、医療情報のクラウド化が本格的に可能となったのです。それからまだ15年しかたっていませんが、現在は医療分野においても、クラウド・バイ・デフォルトの時代を迎えようとしています。

今後も、情報開示指針の認定制度などを含め、ASPICには引き続き大変お世話になることと思います。医療情報の市場自体は決して大きくはありませんが、ぜひ今後ともご協力を賜れば幸いです。

最後になりますが、ASPICの今後ますますのご発展を祈念し、私からのご挨拶とさせていただきます。本日は誠にありがとうございます。



山本様には、クラウド事業者が医療情報を取り扱う際の安全管理のガイドライン策定で、委員長としてご尽力を頂き、医療情報を外部保存できることとなり、市場拡大につながりました

情報セキュリティ大学院大学教授

後藤 厚宏
ATSUHIRO GOTOH

1984年日本電信電話公社(NTT)に入社、約27年間情報技術に関する研究開発に従事。2011年に情報セキュリティ大学院大学教授に転身し、2014年より研究科長、2017年4月から2025年3月まで同学長。現在、サイバーセキュリティ推進専門家会議議長、総務省サイバーセキュリティタスクフォース座長、経済安全保障重要技術育成プログラム/先進的サイバー防御機能・分析能力強化プログラムディレクターを併任。

セキュリティの課題に対しガイドライン等でサポートするASPICは “企業活動にとって優しい組織”だと感じています

まず、河合会長、そして長年にわたりASPICを支えてこられた皆さま、関係者の皆さまに、心よりお祝いを申し上げます。創立25周年、誠にありがとうございます。

私がASPICの活動に関わらせていただいたのは、たしか2012年頃、ちょうど、クラウドセキュリティに関する研究会が立ち上がるタイミングでお声がけいただきました。当時、私は大学院でクラウドセキュリティの研究を始めたばかりで、研究テーマとASPICの取り組みが非常にうまく重なり、自然な形で関わらせていただくことになったのです。

その後、総務省と連携した「ASP・SaaS・クラウド普及促進協議会」においても、2013年頃の初期段階から、ガイドラインづくりに携わらせていただきました。

クラウドセキュリティの時がそうでしたが、振り返ってみると、ちょうど私が研究活動をしているときに、河合会長からそれに関するお声がけをいただいていたように感じます。研究の流れを先取りされているような場面があり、私自身とっても非常に勉強になる経験でした。

ある時、「次は、IoTのセキュリティをやりたいです」と言われたのですが、実はこのあたりからちょっと慌てしまいました。なぜならIoTのセキュリティについての研究は途中でしたので、改めて「河合会長の取り組みは早いな」と思ったエピソードでした。

2014年から2015年頃、今度はAIが組上に登りました。正直に申し上げると、当時はまだ現在のような大規模言語モデルが登場する前で、私自身もそこまで切迫感を持って捉えてはいませんでした。しかし、その段階で「AIをやろう」と言われた河合会長の先見性と、その「技術の流れを見る力」

の確かさに、今あらためて感心しております。

ASPICの活動を見ていて私が一貫して感じるのは、「安心・安全なサービスを推進することで、企業活動を元気づけ、利活用を後押しする」という姿勢です。企業にとって特に心配なセキュリティの課題に関しても、ASPICではガイドラインを通じて丁寧にサポートし、前向きに取り組める環境を整えている。非常に企業に優しい組織だと思っております。

また、現場の声をしっかりと取り入れ、多方面の有識者が議論を重ねたうえで成果をまとめてきたことが、結果として総務省の政策にも反映される、信頼性の高い取り組みにつながってきたのだと思います。

これからは、AIのさらなる進展に加え、IOWNに代表される光技術など、新たな技術革新が次々と現れてきます。こうした時代に、企業がどのように安心して技術を活用していくのかは、大きな課題です。そのような課題も技術も、今後ますます加速度的に広がっていくことでしょう。

そうした中で、ASPICの取り組みは今後さらに重要性を増していくと考えています。私自身も、引き続き皆さまと一緒にしながら、ASPICの活動に協力・支援していきたいと思っております。ASPICの今後のさらなる発展を心より祈念し、私からのご挨拶とさせていただきます。本日は誠にありがとうございました。



後藤様にはASP・SaaSクラウド普及促進協議会の検討会の主査として、クラウドサービス、IoTおよびAIサービスセキュリティ対策ガイドラインの作成等に長年にわたり、懇切丁寧なご指導を頂いております

東京都立科学技術大学（現・都立大学）名誉教授

島田 達巳

TATSUMI SHIMADA

大阪市立大学博士（経営学）。現職・東京都立科学技術大学（現・都立大学）名誉教授、摂南大学名誉教授、歌人（八雁短歌会会員）。主著『アウトソーシング戦略』（編著・日科技連・1995年）、「地方自治体における情報化の研究—情報技術と行政経営」（文眞堂・1999年）、「経営情報システム（改訂3版）」（共著・日科技連・2007年）。

河合会長の先見の明とともに ますます盛んな事業意欲にはいつも感銘を受けています

私が最初に河合会長とご縁をいただいたのは、会長がNTT データで事業部長を務めておられた頃です。東京都のITに関する委員会でご一緒させていただいたのがきっかけでした。それ以来、もう35年ほどになりますが、その間、本当にさまざまな場面でご厚意をいただきましたし、実際には私のほうが河合会長から教えられることの方が多かった、そんな日々だったと思っています。

皆さんもよくご存じのとおり、河合会長は大変折目正しく、常に謙虚な姿勢を崩されない方です。私自身も心から尊敬しております。先ほど「先見の明」というお話がありましたが、私から見ると、それに加えて、何より事業意欲が非常に旺盛であることが印象的です。まさに「老いてますます盛ん」と言いますか、年を重ねるほどに事業への情熱が高まっておられる、そんな印象を受けております。

私はASPICの創立15周年の際にも出席させていただきました。もともと大学では経営情報学や経営学を研究してきましたので、経営の視点からASPICの歩みを拝見してきました。創立から15周年を迎えるまで、特にNPO時代は、総務省の方々もよくご存じのとおり、さまざまなご苦勞があり、決して経営が安定していたとは言えない時期だったと思います。

しかし、15周年以降、今日に至るまでの歩みを見ますと、経営は極めて安定し、特に社団法人へと移行されてからは、組織としての自由度も高まり、大きく羽ばたくように発展されてきました。その勢いのまま、今日の25周年を迎えられたのだと感じております。

本日、『ASPICクラウドマガジン』第2号が刊行され、帰

りに皆さんのお手元に渡ると伺っていますが、私もその中でいくつか書かせていただきました。その一つとして、ASPICをSWOT分析してみた内容がありますので、ぜひご覧いただければと思います。SWOT分析というのは、強み・弱み、機会・脅威を整理し、戦略を考えるための枠組みです。

本日、総務省の中村課長のご講演にもありましたが、日本のIT産業は国際的に見て競争力が低いという厳しい現実があります。さらに、OECDの調査を日本生産性本部が整理したデータを見ると、日本のIT産業の生産性は、2019年以降、年々低下し、OECD諸国の中でも最下位に位置しております。

これは、今日ご参加のIT産業の皆さん、そしてそれを支えるASPICが一体となって、この生産性をどう高め、競争力をどう回復していくのか、AIをどう活用して立ち向かっていくのかという、大きな課題を突き付けられているということだと思います。

それでは簡単ではございますが、以上をもちまして、私からのお祝いの言葉とさせていただきます。本日はありがとうございました。



島田様には、ASP・SaaSクラウド普及促進協議会主査、ASPICクラウドアワード審査委員長、情報開示認定制度の審査員として長年にわたり精力的に活動を賜り、ASPICの事業活動に大変なご支援を頂いております

株式会社NTT データグループ
取締役常務執行役員

西村 忠興

TADAOKI NISHIMURA

1993年、慶應義塾大学理工学部を卒業後、株式会社NTT データに入社。第二公共事業本部第四公共事業部長、第一公共事業本部第一公共事業部長、第一公共事業本部副事業本部長、執行役員公共統括本部第一公共事業本部長、執行役員コーポレート統括本部長、取締役執行役員などを経て、2025年よりNTTデータグループ取締役常務執行役員。

アワードや情報開示認定など100を超える取り組み これほど活発に活動している団体は他にないのではないか

本日は、河合会長をはじめASPICの皆さま、そして関係者の皆さま、創立25周年、誠にありがとうございます。このような記念すべき、晴れやかな場にお招きいただき、大変光栄に思っております。

私の祝辞はこの順番での登壇となりますので、すでにお話しされた内容と多少重なる部分もあるかと思いますが、その点をご容赦いただければと思います。

この25年のASPICの歩みを振り返りますと、やはり一貫して感じるのは、「常に一步先を見据えた活動をされてきた」ということです。これは協会の名称の変遷を見てもよく分かります。ASPから始まり、まだ「クラウド」や「SaaS」という言葉が一般的ではなかった時代から、それらの概念をいち早く取り込み、おそらく世の中より3年、5年は先行して使い続けてこられた。そして2020年にはAIを掲げ、現在の急速なAIの発展を先取りするかのよう、活動をアップデートされてきました。その先見性には、改めて敬意を表したいと思います。

今回、25年の歩みをまとめた資料を拝見しましたが、これまでに策定・発表されてきた数々のガイドラインをはじめ、アワードや認証制度の新設など、その取り組みは実に100を超えています。これほどまでに継続的かつ活発な活動を行っている組織は、なかなか他にはないのではないかと感じました。

中でも、いわゆるカタカナ「アスピック」、すなわちサービス紹介サイトを軸とした取り組みは、利用者、事業者、そして業界全体にとっての“三方良し”を実現する、非常にサステナブルで優れたビジネスモデルだと思っています。その

先駆けとしてこのサービスをはじめた点も、ASPICの大きな功績の一つだと感じています。

最後に少し個人的なお話をさせていただきます。実は私には、河合会長との思い出がたくさんあります。それと申すのも、私がNTT データに入社した当時、河合会長は私の所属する組織の取締役を務めておられていたのです。おそらく、今の私と同じくらいの年齢だったのではないかと思います。その後、会長はほどなくしてASPICを立ち上げ、25年にわたって活動を続けてこられた。その年月を思うと、私自身がこれから25年を見据えたとき、正直、気が遠くなるような思いもします。ただ、それを年齢のせいにははいけないうのだと、今日あらためて感じさせていただきました。

これからも、河合会長をはじめASPICの皆さまが、社会の発展に向けて力を尽くされていくことを、心から楽しみにしております。本日は誠にありがとうございました。ありがとうございました。



西村様は常務理事会社としてASPIC設立当初から、中心的かつ全面的にご支援をいただいております

内閣官房サイバー通信情報監理委員会設置準備室
内閣参事官

高村 信
SHIN TAKAMURA

内閣官房にてサイバー通信情報監理委員会の設置準備を担当。総務省 総合通信基盤局 データ通信課、国際戦略企画官、同 国際戦略局技術政策課 研究推進室長、サイバーセキュリティ政策統括官付参事官、情報流通行政局 参事官を経て、2023年7月から内閣官房サイバー安全保障体制整備室内閣参事官として、サイバー対処能力強化法の成立や国家サイバー統括室の設置を担当。2025年7月より現職。

河合会長が受章された旭日小綬章は、長年にわたり ASPIC を代表する重責を担われたことに対するものです

本日はこのような席にお招きいただき、ありがとうございます。実は会長からお声がけをいただいた際、「乾杯の発声には、私なんかより、もっとふさわしい方がいらっしゃるのではないですか」と申し上げたんです。ただ、「ぜひに」と言われまして、それなら単なるお祝いの言葉ではなく、少し裏話のようなお話をしたほうがいいのかと思い、今日はそのつもりでお話しさせていただきます。

改めまして、ASPIC 創立 25 周年、誠にありがとうございます。この「25 年」という時間の重みは、本当に大きなものがあります。実は、河合会長が旭日小綬章を受章されるに至った背景にも、この長い歩みが大きく関係しています。任意団体の期間は残念ながら評価の対象にならず、NPO 法人として登記してからの 20 年超の活動が正式に評価され、今回の受章につながりました。

秋と春に行われる叙勲や褒章には、それぞれ性格の違いがあります。褒章は、個人の顕著な功績や成果を顕彰するものですので、必ずしも継続性は重視されません。一方、叙勲というのは、長年にわたり一つの分野に取り組んできた団体において、指導的な役割を果たした方に贈られるものです。その意味で、河合会長の受章は、個人というよりも、ASPIC という団体そのものが日本のクラウド分野を代表する存在であると、政府全体として認めた結果だと言えます。

ただ、ここに至るまでの道のりは、決して平たんではありませんでした。「先見の明がある」「時代に合わせて名前を変えてきた」という評価の裏で、実はそれが最大のハードルでもありました。政府内で「ASPIC は日本のクラウドを代表する団体です」と説明して回りますと、「名称が何度も変わっ

ている」「定款も変わっている。それは、やっていること自体が変わり続けているのではないかと、厳しい指摘を受けたこともあります。

そこで事務局の高橋伸之さんをお願いして、登記所に残っている過去の定款をすべて取り寄せてもらいました。そして一つひとつ確認しながら、「これは当時の言葉で言えば、今でいうクラウドを指しているんです」と説明し、説得を重ねていきました。その結果、ASPIC は名称や表現を時代に合わせて変えながらも、本質的には 20 年以上にわたりクラウドの発展に取り組んできた団体である、という理解を得ることができたわけです。

最後に一つ申し上げておきたいのは、今回の叙勲は、河合会長個人に対するものというより、ASPIC そのものに対する評価だという点です。ASPIC を代表するという重責を 20 年にわたり担ってこられた、その役割に対して贈られたものです。ですから、会長でなければならぬ、ということはありません。会長代理や副会長として団体を支え、あるいは次の時代を担って 20 年取り組めば、その方にも十分に可能性があります。ぜひ「われこそは」と思われる方には、手を挙げていただきたいです。われわれとしても、これから先も ASPIC をしっかり応援していきたい、そう考えております。



高村様には ASP・SaaS データセンター促進協議会の設立、運営、2023 年の会長の河合の叙勲に際して総務省の推薦担当として多大なご尽力を頂くなど、長年にわたりご指導ご支援を頂いています

ASPIC 常務理事
株式会社 NEUGATE 社外取締役

村松 充雄
MITSUO MURAMATSU

“第 3 の創業期”を迎えた ASPIC は これからも新たな事業を展開してまいります

僭越ながら、中締めに務めさせていただきます。本日は、これほど多くの皆さまにお集まりいただき、誠にありがとうございました。今日この場で頂戴した数々の貴重なご意見につきましては、今後の ASPIC の活動推進に、しっかりと活かしていきたいと考えております。

先ほど河合会長からも説明がありましたとおり、ASPIC は「クラウドの安全・安心の確保」と「普及拡大」を命題に掲げ、5 つの活動の柱を立てて取り組んでまいりました。その結果として、いわゆる「トリプル 1000」を達成することができました。会員数は 1300 を超え、アワードの登録数も 1000 件以上、さらにカタカナ「アスピック」の登録数も 1300 に達しています。これらの成果は、ひとえに総務省様をはじめとする関係省庁の皆さま、そして会員企業の皆さまのご支援のたまものであり、心より感謝申し上げます。

さて、これからの ASPIC ですが、活動の柱をこれまでの 5 本から 6 本へと拡充し、「第三の創業期」として新たな事業展開に取り組んでいくことといたしました。今後は、ASPIC 単独で進めるというより、ASPIC と会員企業の皆様の得意技を連携したアプローチで価値を創出していきます。

今月から始まる「ASPIC クラウドサービス検定」につきましても、検定の実施自体は ASPIC が担いますが、研修や e ラーニング教材の作成、さらには受験者の拡大については、会員企業の皆さまのお力をお借りしながら進めていきたいと考えています。こうした取り組みが、人材育成や採用といった面でも、会員企業の皆さまにとって有効に機能する流れをつくれればと思っております。

また、AI 分野については、この 10 月から「日本クラウド

産業株式会社」が営業を開始しました。AI エージェントをはじめとするさまざまな活用ノウハウや手法を同社に蓄積し、その成果を ASPIC ヘフィードバックすることで、最終的には会員企業の皆さまのメリットとして還元していく、循環型の仕組みを作っていきたいと考えています。そのためにも、引き続き皆さまのご支援を賜れば幸いです。

このような取り組みを重ねながら、次なる節目である創立 30 周年に向けて、ASPIC が事業者と利用者が一体となった、他にはないユニークなクラウド団体として歩みを進めていければ願っております。

最後になりますが、ASPIC が今後も日本のクラウドの発展に貢献し、併せて会員企業の皆さまのさらなるご発展につながることを祈念し、一本締めで締めさせていただきます。本日は誠にありがとうございました。



創立 25 周年式典の最後を飾る「御礼・意見交換の会」。約 400 名もの皆さまにご参加いただき、大きな盛り上がりの中、執り行われました



総務省関係者におかれましては、現役・OB を問わず、多数のご来賓の皆さまにご参加いただいております



“赤い花”を胸元につけられているのが、日頃からお世話になっているご来賓の皆さま。ご多忙の中、駆けつけていただきました



情報通信行政の第一線で活躍する有識者による、知見と経験に裏打ちされた密度の高いディスカッション



産学官の知見が交わる貴重な時間。旧交を温め、新たな繋がりを育み、さまざまな側面から意見を交わす姿が見受けられました



会場では、ご参加の皆さまにインタビューも実施いたしました。ASPIC やクラウド業界全般に対する貴重なご意見を数多く頂戴しています



宴に花を添えたのは、ピアニスト・Tonica さんによる生演奏。その美しい旋律は祝賀ムードを一層高める素晴らしいアクセントに



会の結びには、感謝の意を込めて理事・役員一同で皆さまをお見送り。盛況のまま、記念すべき一日は幕を閉じました



記念式典の閉会后、なかなか集まる機会の少ない理事・役員、事務局メンバーが一堂に会し、集合写真を撮影致しました

「御礼・意見交換の会」には、本来であればご祝辞を賜るべきところ、限られた時間の制約からご挨拶の機会をご用意できなかった、ASPICの活動に長年ご尽力いただいている多くの皆さまにもご参加いただきました。ここでは略儀ながら、お名前のみご紹介させていただきます。

・総務省関係

- 総務省 大臣官房長 山崎良志 様
- 総務省 総合通信基盤局長 電気通信事業部長 吉田恭子 様
- 内閣官房 デジタル行政改革会議事務局 次長 吉田宏平 様
- 総務省 国際戦略局 国際展開課長 西浦智幸 様
- 総務省 情報流通行政局 情報通信経済室長 加藤悠介 様
- 日本郵便株式会社 常務執行役員 東京支社長 高橋文昭 様
- 株式会社横須賀リサーチパーク
代表取締役社長 鈴木茂樹 様 (元総務省 事務次官)
- 情報未来創研代表 稲田修一 様 (元総務省 大臣官房審議官)
- 一般財団法人海外通信・放送コンサルティング協力
理事長 南俊行 様 (元総務省 政策統括官)
- 一般財団法人全国地域情報化推進協会
理事長 吉田真人様 (元総務省 総務審議官)
- 株式会社リーテックス
顧問 安藤英作 様 (元総務省総括審議官)

株式会社NTTデータフロンティア

- 常務取締役 黒瀬泰平 様 (元総務省 関東総合通信局長)
- 株式会社三井住友海上保険
顧問 鈴木信也 様 (元総務省 総括審議官)
- 三菱UFJ信託銀行株式会社
業務顧問 玉田康人 様 (元総務省 総括審議官)

・大学関係者

- 千葉大学名誉教授 阪田史郎 様

・関係団体

- 一般社団法人東京都情報産業協会会長 高梨輝彦 様
- 一般社団法人神奈川県情報サービス産業協会会長 板橋哲也 様
- 公益社団法人千葉県情報サービス産業協会会長 宮城和彦 様
- 一般社団法人熊本県情報サービス産業協会会長 豊住周二 様
- 一般社団法人ソフトウェア協会専務理事 笹岡賢二郎 様
- 一般社団法人保健医療福祉情報システム工業会
運営会議議長 岩津聖二 様
- 一般社団法人埼玉県中小企業診断士協会 副会長 山田静也 様
- 一般社団法人日本教育情報化振興会 常務理事 中沢研也 様
- 一般社団法人日本情報経済社会推進協会 常務理事 坂下哲也 様
- 特定非営利法人日本情報技術取引所 理事長 岩下隆祐 様
- 一般社団法人WICC理事長 三浦宏一 様
- 一般財団法人日本システム開発研究所 代表理事 桜内文城 様

「御礼・意見交換の会」 会場で寄せられた声

本日は誠にありがとうございます。
環境の変化に対応しながら歩みを重ねてこられた ASPIC ですので、これからも 25 周年を超えて、30 年、50 年と活躍されていくものと思っています。
今後ともよろしく願いいたします。

ASPIC が創立 25 周年を迎えましたが、実は、僕自身の会社もちょうど 25 周年を迎えたばかりなんです。
ASPIC さんと同じ 25 年の歩みを重ねてこられたことを、とてもうれしく感じていますし、同じ時代と一緒に歩んできたんだ、という思いも強いですね。
これからも、ぜひ一緒に歩んでいければと思っています。今後ともよろしく願いします。

今日も河合さんの元気なお姿を拝見できて、とてもうれしかったです。ASPIC も、これからますます発展していくに違いないと、確信を持って帰ることができました。
本日は本当におめでとうございました。

ASPIC 25 周年、誠にありがとうございます。
これからも ASPIC の旗の下、日本のクラウドサービス推進のために尽力したいと思っています。

私たちも ASPIC とともに歩んできましたが、この組織を支えてきたのは、ひとえに河合会長の「思い」だと感じております。その情熱と先見性に、私たちはただついてきただけです。
そうした歩みが今日につながったことを、心から喜ばしく思い、深くお祝い申し上げます。

今日は本当に 25 周年おめでとうございます。
ASPIC には立ち上げ当初から参画させていただき、多くのことを学ばせていただきました。河合会長のあふれる情熱とリーダーシップからも、常に刺激を受けています。
今後のさらなるご発展を心より期待しております。

ASPIC さんには本当にお世話になっています。さまざまな企業の方と出会う機会などをいただき、とても貴重でありがたく感じています。
ぜひ今後とも、よろしく願いします。

われわれの会社は、生成 AI を使ったクラウドサービスを提供していき、「アスピック」の ASP・クラウドサービスの、AI の方のサービスにかなり初期から登録させていただいております。
そして、ASPIC さんが提供されている研修や情報をいろいろと参照しながら、当社のサービスも安心・安全に社会に届けられるように尽力しているところでございます。

ずっとクラウド事業やってきて、2000 年から ASPIC さんには大変お世話になっております。
今後とも、どうぞよろしく願いいたします。

創立25周年 御礼・意見交換の会



ASPIC と河合会長には、私が総務省に勤めていた時代から本当にお世話になっています。日本のクラウドサービスの先端を走って、道を切り開いてこられたことに、深く敬意を表します。
現在、私が所属している団体も ASPIC さんと協力をして、日本の DX やクラウドを盛り上げていきたいと思えます。

私と河合会長との思い出といえば、やはり医療情報の外部保存に関するガイドラインを一緒に作らせていただいたことです。私自身、医療の世界に長く関わってきましたが、この外部保存は、ASPIC がなければ実現しなかったのではないかと感じています。
本当に河合会長のご尽力あってこそその成果だと感じています。これからもますますのご活躍を期待していますので、ぜひ頑張ってくださいね。

改めまして、本日は ASPIC 創立 25 周年、誠にありがとうございます。これまで総務省の事業や ASPIC さんのさまざまな取り組みに関わらせていただきましたが、何よりも感じるのは、その継続力と、河合会長の影響力の大きさです。業界全体にとっても、そして私自身にとっても大きな刺激であり、日本のため、さらには世界のために情報通信産業を発展させたいという思いで、ここまで邁進してきました。

振り返ってみて、いちばん印象に残っているのは、ASPIC クラウドアワードでグランプリを頂いたことです。あの受賞が、ASPIC とのお付き合いの始まりでもあり、弊社のクラウド事業にとって、その後の成長や上場へとつながる大きな礎になったと感じています。
ASPIC の皆さま、そして河合会長には、本当にお世話になりました。心より感謝しています。

わが社が小規模だった頃、ASPIC に「小さな企業でも参加しやすい会費体系を設けてほしい」とお願いしたことがありました。すると、社員数や売上規模などに応じて会費が変わる仕組みを新たに整えてくださったのです。そして先月、「社員数が 50 名を超えましたね。会費が上がります」と、ご連絡をいただきました（笑）。
実は、次の基準となる売上高までもう少しで、そうなるさらに会費をお支払いすることになります（笑）。このように、「ASPIC に育てていただいている」という実感があるので、これからもぜひよろしく願いしたく存じます。

本日は 25 周年を迎えられて大変嬉しく思っております。
AI 時代に迎えて、これからが真骨頂だと思います。
河合会長をはじめ職員の皆さん、そして関係者の皆様のご健闘を期待しております。

私は企業誘致を担当する部署に所属しているのですが、ASPIC を通じてプレゼンテーションの機会などいただき、とてもありがたく感じています。
本日のような意見交換の場も大変貴重だと思っておりますので、ぜひ今後とも引き続きよろしくお願いいたします。ASPIC の今後ますますのご活躍を心よりお祈りしております。

創立当初から応援してまいりましたが、今後のさらなるご発展を心より期待しております。
本日はありがとうございました。おめでとうございます。

記念講演会



クラウド業界を取り巻く最新の知見を共有するため、各界を代表する識者3名をお招きして開催された「記念講演会」には、およそ350名もの皆さまにお集まりいただきました。

まずはじめに河合会長による主催者挨拶が行われ、ご参加の皆さまへ深謝するとともに、「ASPIC25年のあゆみ～活動概要と今後の取り組み～」と題した講演を実施しています。

この中で河合会長は、ASPICが業界に対して果たしてきた「押す」「引っ張る」「支える」という3つの役割を強調。創立から25年を経て会員数が1300社以上に拡大した実績や、月間約30万ビュー・掲載サービス数1300超へと成長を遂げたクラウドサービス紹介サイト「アスピック」の成果など、四半世紀にわたる活動の軌跡を振り返りました。さらに、2025年に立ち上げた「日本クラウド産業株式会社」の紹介を含め、将来を見据えた新たな事業展開についても説明されています。

続いて、ご来賓として衆議院議員・総務大臣政務官の向山淳様よりご祝辞を頂戴し、ASPICが長年にわたり果たしてきた社会的役割への評価と、今後の活動に対する一層の期待が語られました。

その後は、クラウド・AI情報通信政策の各分野を牽引する著名な識者3名が登場。

講演(1)では、Preferred Networks株式会社 代表取締役の岡野原大輔様より、半導体や計算基盤の開発から、生成AIの基盤モデル、さらにはソリューションや製品に至るまで、AI技術のパリチェーンを垂直統合する同社の先進的な取り組みについて詳説されました。続く講演(2)では、NTT株式会社 チーフエグゼクティブフェローの川添雄彦様より、オール光技術を活用した「ALL-Photonics Network」の開発構想と、それがもたらす社会的意義について、興味深いお話を伺っています。講演(3)では、総務省 情報流通行政局 情報通信政策課長の中村裕治様が、情報通信行政をめぐる昨今の情勢変化や、最新の政策動向について解説。

いずれの講演も、AI技術が社会に与えるインパクトや次世代ネットワークの展望、そして国の政策動向など、これからの情報通信社会を見通す上で多くの示唆に富む内容となりました。

本誌では、編集部がこれら3つの講演の重要ポイントを独自に整理した詳細レポートを掲載しております。

衆議院議員
総務省 総務大臣政務官

向山 淳

JUN MUKOYAMA

1983年、埼玉県出身。慶應義塾大学法学部政治学科卒業。三菱商事に13年間勤務した後、ハーバード大学公共政策大学院を修了（行政学修士）。公益財団法人国際文化会館アジア・パシフィック・イニシアティブ主任研究員などを経て、2024年10月の衆議院議員選挙で初当選。2025年10月より総務大臣政務官。

クラウドサービスにおける先駆者として ますます積極的に活動されますことを心から期待をしております

ASPIC 創立25周年記念講演会が、このように盛大に開催されますことを、心よりお喜び申し上げますとともに、一言ご挨拶申し上げます。

はじめに、ASPIC が創立25周年という大きな節目を迎えられましたことに、心からお祝いを申し上げます。また、本日表彰を受けられた皆さまに対しまして、これまでのご功績に敬意を表し、心よりお祝い申し上げます。

近年、クラウドサービスは著しい普及と発展を遂げており、多くの企業において、クラウドの活用を通じたビジネスモデルの刷新、業務効率の向上、さらにはコスト削減が進められているものと承知しております。また、民間分野にとどまらず、行政においてもクラウド活用が着実に進展し、わが国全体のデジタル化を推進する重要な原動力の一つとなっています。

このような状況の中、ASPIC におかれましては、「ASPIC クラウドアワード」の開催を通じてクラウド業界全体の活性化に貢献されてきたほか、「クラウドサービスの安全・信頼性に係る情報開示認定制度」の推進など、クラウドを安心・安全に活用するための環境整備に多大な役割を果たしてこられました。河合会長をはじめ、関係者の皆さまのこれまでのご尽力に対し、深く敬意を表します。

今後、クラウドの利活用をはじめとするデジタル化は、人口減少や少子高齢化に伴う労働力不足への対応、さらにはイ

ノベーションを通じた社会課題の解決を支える重要な鍵になると考えております。加えて、生成AIなどの新たな技術が急速に進展する中で、クラウドは日々の経済活動や社会活動において、ますます欠かせない基盤となっていくことでしょう。

こうした中であって、ASPIC の取り組みは今後一層その重要性を高めていくものと考えております。クラウドサービス分野における先駆者として、今後ますます積極的に活動されることを、心から期待しております。

結びにあたり、改めて河合会長をはじめとする関係者の皆さまのこれまでのご尽力に深く敬意を表するとともに、クラウド業界のさらなる発展、そして本日ご参集の皆さまの一層のご健勝とご活躍を祈念いたしまして、私からのご挨拶とさせていただきます。

ASPIC 創立25周年、誠におめでとうございます。

AIで世界はどう変わるのか

Preferred Networks 共同創業者・代表取締役 最高技術責任者
Matlantis 代表取締役

岡野原 大輔

DAISUKE OKANOHARA

ASPIC25周年記念講演として最初に登壇したのは、日本最大のAIユニコーン企業として注目を集める株式会社 Preferred Networksの共同創業者・岡野原大輔氏。「AIで世界はどう変わるのか」をテーマに、AI開発の最前線に立つ同社が推進する「半導体からアプリケーションまでの垂直統合」という独自の戦略、そして激化する国際競争下において日本企業はどのように競争力を維持していくべきかが語られました。

半導体からアプリケーションまで、生成 AI 時代の「垂直統合戦略」

「現実世界を計算可能にする」PFNのミッション

PFNは、AIの専門家である岡野原氏と、半導体・スーパーコンピュータ設計の専門家・西川徹氏によって2014年に創業されました。

「現実世界を計算可能にし、共に未来を創り出す」というミッションを掲げ、デジタルデータだけではなく、現実世界の複雑な現象をセンシングやシミュレーションによって計算可能な状態に置き換える。そして最適解を導き出し、再び現実世界へフィードバックする。このサイクルこそが、PFNの事業の核



となっています。

同社の特徴は、AI基盤モデル（大規模言語モデル）から、それを動かすための計算インフラ（スーパーコンピュータ）、計算の土台となる半導体（チップ）、最終的なアプリケーションに至るまで、一気通貫で手がける「垂直統合型」の事業モデルです。これらを連携させることで、競争力の高い技術開発と産業応用を目指しています。

なぜソフトウェア企業が「半導体」を作るのか

IT業界において、ソフトウェア企業がハードウェア、それも最先端の半導体を自社開発することは極めてまれであり、リスクも高い挑戦です。しかし岡野原氏は「AIが進歩していくにあたって、最も重要なのは半導体だ」と断言します。2014年の創業当時から、PFNは共同創業者である西川徹氏らが持つ半導体設計の知見を活かし、深層学習（ディープラーニング）の計算に特化した専用チップ「MN-Core」シリーズの開発を続けてきました。

現在、AI開発の現場で事実上の標準となっているのはNVIDIA製のGPUといえるでしょう。しかし、岡野原氏は現在

の生成AIを利用する上で生じる構造的な課題として「メモリ転送のボトルネック」を指摘します。AIモデル、特にLLMの巨大化にともない、計算回路そのものの処理速度よりも、大量のデータを移動させる際の転送速度と、電力消費や発熱が大きな問題となっているのです。

これに対し、PFNが開発を進める次世代のMN-Coreは、メモリと計算回路を直接接合する「三次元積層技術」を採用しています。メモリ・計算回路間の物理的な距離を極限まで縮めることで、従来のGPUアーキテクチャと比較して転送速度と、劇的な電力効率の向上とを狙っているのです。

国産 LLM「PLaMo」の戦略的ポジショニング

同社が開発・提供する大規模言語モデル「PLaMo（プラモ）」はフルスクラッチ、つまり他社のモデルをファインチューニングするのではなく、ゼロからデータを集めて学習させています。とはいえ、OpenAIやGoogleといった世界の巨大テック企業と比較すると、PFNが保有する計算資源には限りがあります。その制約の中で世界と戦うために岡野原氏が採用したのは「日本語性能をしっかりと上げていくこと」「産業領域に向けた特化モデルを作ること」でした。

かつての「Scaling Laws（スケーリング則）」では、モデルのサイズを巨大化させることが性能向上の王道とされてきました。しかし最新のトレンドでは、学習させるデータの質を高めることで、モデルサイズを抑えて推論コストを下げながら、巨大モデルに匹敵する性能を出せることが証明されつつあります。実際に最新版のPLaMo 2.1は、比較的小規模なモデルでありながら、ChatGPTやGeminiといった世界のフロンティアモデルと比べても、日本語性能においてはトップクラスのベンチマークスコアを記録しているのです。

また、大規模なフロンティアモデルであっても、いざ業務に活用しようとする、その業界特有の専門用語が分かっておらず、まったく使い物にならないというケースは少なくありません。

そこで、PLaMoのベースモデルに特定のドメイン知識を追加した「特化モデル」——例えば金融分野において、証券アナリストや会計士が受けるテストや教科書、さまざまな企業の分析レポートなどを多数学習させた金融特化モデルなど、さまざまな領域や特定のクライアントの要望に応じた特化モデルの開発を進めています。

また、スマートフォンや自動車、ロボットの内部（エッジ）で動作する小型モデルへのニーズも急増中です。PLaMoは、こうした「産業界の実需」に応えるべく、汎用モデルだけな

く、特定ドメインに特化したモデルや軽量モデルのラインアップを拡充しています。

実世界を変革する AI ソリューションの実践

講演の中盤では、PFNの技術が実際どのように「現実世界」を変えているのか、3つの象徴的な事例が紹介されました。

①バックオフィス革命：Preferred AI Work Suite

1つ目は、企業のバックオフィス業務の自動化です。経理・財務、営業、広報・マーケティング、経営企画、人事、総務などの業務には、依然として非定型なデータ処理が多く残されています。PFNのソリューションは、社内の規定やフォーマットをLLMに理解させ、例えば「就労証明書」の作成において、従来1件あたり約10分を要していた作業を約1分に短縮するなど、劇的な生産性向上を実現しています。

②リテールAIと地方の課題解決：Misemise

2つ目は、小売チェーンストアのDXを実現するソリューション「Misemise（ミセミセ）」です。

小売店の現場では、店舗の品出し、在庫管理、棚割り、値引きなどさまざまな課題がありますが、そういった業務負担をAI技術を用いて劇的に軽減することを目指した製品です。

これらを最適化する上では正確なデータの取得が不可欠ですが、「Misemise」では自律移動ロボットを活用しています。ロボットが店舗内を巡回し、棚の画像を取得。画像認識とLLMを組み合わせて在庫状況や棚割りの乱れ、値札の誤りを検知するのです。岡野原氏が強調したのは、この技術が東京ではなく地方から普及しはじめていくという点です。

人手不足が深刻化し、店舗運営が立ち行かなくなりつつある地方こそ、AIロボットへの受容性が高く、切実なニーズが存在します。これは、テクノロジーの社会実装を考える上で重要な示唆を含んでいるといえるでしょう。



③科学計算の高速化：Matlantis

三つ目は、恐らくPFNの技術力を最も象徴するプロダクトである、材料探索用の汎用原子レベルシミュレータ「Matlantis

現実世界を変えていく Preferred Networks の AI ソリューション

(マトランティス)」です。

より長持ちする電池の材料や、高性能の半導体の材料など、新しい素材を作る際、これまでは「実験しては失敗」を繰り返すか、スーパーコンピュータで膨大な時間をかけて計算する必要がありました。

そこでMatlantisは「PPF (Preferred Potential)」という世界最高レベルの精度と汎用性を持つ独自のAIモデルにより、ニューラルネットワークを用いて原子間のポテンシャルエネルギーを推論する手法を確立。これにより、従来の精度を維持したまま、計算速度を劇的に高速化することに成功したのです。既に国内外10の企業・団体に利用され、月あたり数兆原子がシミュレーションされているといます。

特に注目されているのが、2025年のノーベル化学賞を受賞したMOF（金属有機構造体）研究分野での活用です。MOFは金属と有機物が組み合わさった構造で、組み合わせ次第で無限の特性を生み出す可能性があります。こちらも従来はスーパーコンピュータで何カ月もかかっていたシミュレーションが、Matlantisを使うことで数百万～数千万倍も高速化され、実用的な材料開発に貢献しています。

生成AIの進化トレンドと「価格破壊」の衝撃

岡野原氏は、AI技術の進歩を振り返りつつ、今後を見通す上で、二つの重要なトレンドがあると紹介しました。

第一に、AIは「淡々と少しずつ予測可能な形で賢くなり続けている」ことです。計算量とデータ量を投入すれば、それに応じてベンチマークスコアが順調に向上することが、数式的に予測可能な状態になっています。

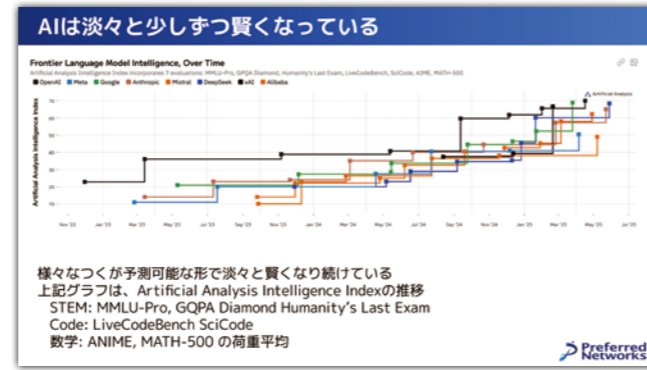
2022年から2025年にかけて、主要なAI開発企業のモデルは着実に性能を上げ続けていますが、まだまだ頭打ちの兆候は見られません。10年前は壮大な挑戦とされた「東大入試合格」や「医師国家試験合格」も、今では特別な工夫なしに達成できるレベルにまでなっています。

現在、人類には解読不能な古代文字の解読や、未解決の数学的難問に対しても、AIの正答率は着実に上昇しており、来年には多くのタスクで人間を凌駕することが確実視されているのです。

第二のトレンドは、圧倒的な価格破壊です。

岡野原氏の試算によれば、同じベンチマークスコアを達成するAIにかかるコストは、年間で約1000分の1のペースで低下しているといいます。現在「1万円かかるから採算が合わない」と判断されているタスクが、翌年には数百円から数十円で実行可能になるのです。これは奇跡的な技術革新ではなく、競

スーパーコンピュータで数カ月かかっていた計算を数千万倍高速化



争が激しいIT業界で技術者たちがコスト削減のための細かい努力を積み重ねた結果だといいます。

プログラミング、翻訳、要約、データ分析。これまで人件費というコストの壁に阻まれてきたあらゆる業務が、AIによって再定義されることでしょう。この「コスト構造の変化」を前提に事業計画を立てられるかどうか、企業の明暗を分けることになるはずだ。

デジタルからフィジカルへ「ロボット基盤モデル」

大規模言語モデル（LLM）の次は何か。岡野原氏は「ロボット基盤モデル」、いわゆるフィジカルAIの台頭を予測します。

従来のロボット制御は、「水の入ったコップを机の上に置く」簡単な動作であっても詳細なプログラムを記述する必要がありました。「机のどちら側が上か」「コップを傾けたら水がこぼれる」といった常識をロボットは知らないからです。

しかしLLMを搭載したロボットは、同様の指示に対し、「PCの横に水があるのは危ないですけど大丈夫ですか?」といった気を利かせた上で、自ら手順を生成して実行できるようになります。

LLMをベースとし、視覚情報（Vision）をもとにロボットの行動（Action）を直接生成できるAIが「VLA（Vision-Language-Action）」です。今後、VLAを使ったロボット制御が多く登場することが予測されています。

さらに、自動運転の分野でも生成AIによる革命が起きているといいます。「雪の東京の交差点」や「子供が飛び出す危険な状況」などの映像をシミュレーション空間内でAIが無数に生成し、それを学習データとしてAI自身を鍛えるアプローチがはじまっているのです。

「課題先進国」を逆手に取る日本の勝ち筋

現在のAI開発競争ではアメリカと中国が圧倒的な存在感を示していますが、岡野原氏はそんな中で日本産業界がとるべき

課題先進国・日本の産業界がとるべき「3つの勝ち筋」

「3つの勝ち筋」を提言しました。

①課題先進国であることを強みに変える

少子高齢化や労働人口減少は日本経済の悲観的な材料として語られがちです。しかし、岡野原氏は「むしろこの課題がAIソリューション開発の原動力になる」と主張します。

人手が余っている国では、AIやロボットによる自動化は「職を奪う脅威」として抵抗にあうかもしれません。一方、日本では「AIを使わなければ現場が回らない」という切実な「必要性」が存在します。前述の地方スーパーの事例のように、人手不足が深刻な現場では「まず使ってみよう」という姿勢でチャレンジし、試行錯誤しながら実用化が進んでいきます。日本で磨き上げられた「人手不足解消ソリューション」は、いずれ同じ課題を抱えるアジアや欧州諸国へ展開できる強力な資産となるでしょう。

医療、建設、インフラ保守などのエッセンシャルワーカーの仕事を楽しみ、生産性を上げ、結果として待遇を改善するようなソリューションを作ることが、日本にはできると岡野原氏は語りました。

②強い「フィジカル産業」をAIでさらに加速する

日本には、自動車、素材、ロボット、工作機械といった、世界的に高い競争力を持つ「モノづくり産業」が集積しています。こういった分野とAIを組み合わせることで、さらなる競争力強化が可能です。

材料探索AI「Matlantis」は良い例でした。開発当初、海外にも類似製品が登場し「どうなるか」と不安だったといいます。結果として日本のPFNだけが生き残ったのです。

その理由を分析すると、日本には素材メーカーや電池メーカーが多数存在し、地理的にも近い距離で密なフィードバック

ループを回せたことが大きかったといいます。サイバー空間ではGAFAMに及ばなくとも、フィジカル空間（製造現場や素材開発）のデータと知見においては、日本には一日の長があります。AIという横串を、日本の強い縦割り産業に刺すことで、独自の価値を生み出せるはずだ。

③資源がないことを逆手に取った「省電力技術」の推進

世界中のデータセンターが電力を湯水のように消費し、環境負荷が問題視される中、日本もその流れに乗らざるを得ませんが、一方で資源のない日本には電力供給の制約があります。しかし岡野原氏は「むしろこれを逆手に取り、省電力技術で日本がリードすべきだ」と提案しました。制約があるからこそ、省電力技術が育つのです。

PFNが進める高効率な半導体設計や、NTTが提唱する光電融合技術「IOWN（アイオン）」、そしてエッジコンピューティング。これらはすべて、根本的に電力を減らせる可能性のあるアプローチです。「電力を消費して力技で性能を上げる」海外勢に対し、「ワットあたりの性能」で勝負を挑む。これこそが、技術立国・日本の復権の鍵となるでしょう。

ドメイン知識こそが最強の武器になる

講演の最後で岡野原氏は「AIには可能性もあれば課題もある。特に課題やドメインをよく理解している人が、これから良いAI製品・ソリューションを作っていく」と強調しました。AIはもはや「魔法」ではなく、電気やインターネットと同様の「インフラ」になりつつあります。そして、そのインフラの上で何を作るかを決めるのは、AIの専門家ではなく、それぞれの現場を知り尽くした「ドメインエキスパート」なのです。



IOWN誕生から5年 次の5年に向けて

NTT 株式会社 チーフエグゼクティブフェロー
(前・代表取締役副社長)

川添 雄彦

TAKEHIKO KAWAZOE

記念講演(2)として登壇したのはNTT株式会社チーフエグゼクティブフェローの川添雄彦氏。「IOWN (アイオン/Innovative Optical and Wireless Network)」構想の発表から6年。川添氏は、IOWNを単なる通信インフラの進化ではなく、インターネットに代わる新たな社会基盤であり、日本にとって「最後の武器」「最後のチャンス」になり得ると強調。生成AI普及に伴う電力課題への解としての「光電融合」技術、産業界での具体的なユースケース、そして「デジタル超越」と題された未来像が語られました。

半導体からアプリケーションまで、生成 AI 時代の「垂直統合戦略」

迫りくる「電力の壁」と AI 時代の課題

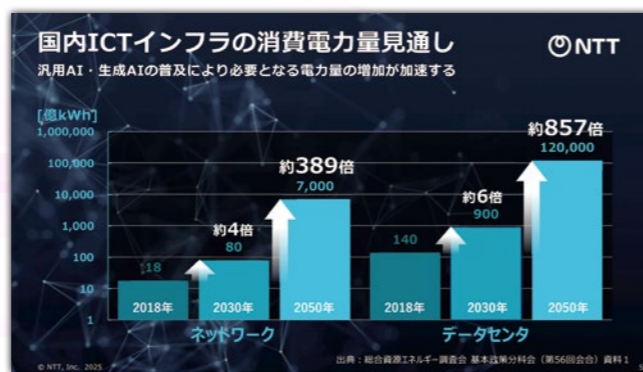
川添氏は講演冒頭、今月(2025年11月)6日に天皇陛下へのご進講を行い、IOWNについて直接説明する機会を得たことを明かしました。この事実は、IOWNが単なる一企業の取り組みを超え、国家的な関心事として極めて高い注目を集めていることを象徴しているといえるでしょう。

IOWN構想が生まれた背景には、デジタル社会が直面する深刻なエネルギー問題があります。NTTは「日本国内のドメスティックな電話会社」というイメージを持たれがちですが、実は世界第3位のデータセンター事業者でもあります。現在1.2ギガワットの運用規模を誇り、さらにこれを2.5ギガワットまで拡張する計画を進めているとのこと。しかし、その足元では通信トラフィックと消費電力が爆発的に増大しており、既存のインフラ技術では限界が見えはじめています。

コロナ禍以降、テレワークや動画配信需要の急増により、通信トラフィックは倍増しています。さらに、生成AIの爆発

的な普及が、データセンターの電力消費量増大に拍車をかけているのです。特筆すべきは、AIの学習に要する莫大なエネルギーでしょう。GPT-4クラスの大規模言語モデル(LLM)が1回の学習で必要とする電力は、なんと原発40基分(約40,000MWh)に相当するというのです。

「AIは本当に便利ですが、その裏で莫大なエネルギーを消費し、CO₂を排出しています。私たちはイノベーションの推進と地球環境の保全という、相反する課題を同時に解かなければ



なりません」川添氏はそう警鐘を鳴らします。

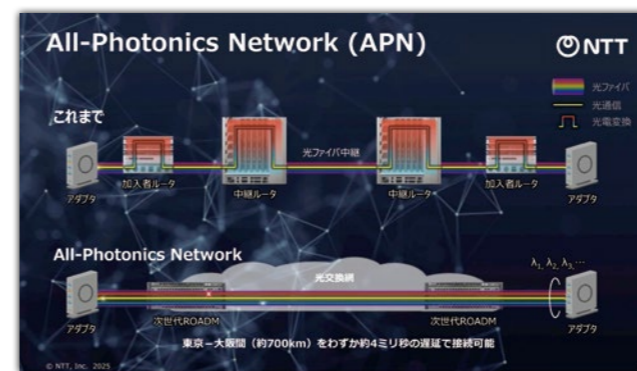
電気による情報処理は、距離に応じてエネルギー消費が増大し、高速化すればするほど発熱するという物理的な限界があります。これに対し「光」は、伝送によるエネルギー損失が極めて少なく、高速化しても消費電力が増えにくい特性を持っています。この「光」のポテンシャルを、通信だけでなく、コンピュータの内部にまで導入しようというのが、IOWN構想の核心なのです。

インターネットの限界を超える「APN」

この課題解決の鍵としてNTTが長年追い求めてきたのがコンピュータの中に「光」を取り入れる「光電融合」技術です。光を「伝送」に使用する光ファイバーは、日本において98%近い普及率を誇っていますが、データ処理部分へ光を導入する技術の実用化には高いハードルがありました。その壁を打ち破ったのが、NTTが世界ではじめて開発に成功した「光のトランジスタ」です。

従来の、シリコン上に化合物半導体を積層するアプローチでは、エネルギー効率の改善に限界がありました。そこでNTTは、半導体を「薄膜(メンブレン)化」する独自技術を開発し、従来技術の100分の1という極小エネルギーでの動作を成功させたのです。

「これはまさに日本から生まれた技術であり、IOWNのベースです」と川添氏は胸を張ります。現在、この技術に関連する特許は世界で100件以上取得されているそうです。



そして、このIOWNの中核をなすネットワークインフラが「APN (All-Photonics Network)」です。現在のインターネットは、光ファイバー回線を使用しているにもかかわらず、途中でルータが介在するため遅延が発生し、その速度も一定しない「揺らぎ」が生じます。これに対し、APNはエンド・ツー・エンドを光で直結する仕組みです。間にルータを挟まず、特定の波長を占有して通信するため、以下の3つの圧倒的な性能が実現するとされています。

電力効率が 100 倍、伝送容量が 125 倍、遅延時間が 1 / 200 に

- ・低消費電力：電力効率が100倍に
- ・大容量・高品質：伝送容量が125倍に
- ・低遅延・確定遅延：遅延時間が1/200に

特に「遅延が確定している」ことが、遠隔操作などの産業応用において決定的に重要となります。

川添氏は、「インターネットは電気の世界であり、その限界を超えるには光の世界へ行くしかない」と述べ、APNがインターネットの次世代、あるいはそれを補完・代替するインフラであることを示唆しました。



産業を変革する IOWN のユースケース

講演では、APNの特性を活かした具体的な産業応用事例が5つの分野で紹介されました。これらは実験室レベルの話ではなく、実際のビジネス現場での実証が進んでいるものです。

①建設：1,200km離れた場所から「違和感なく」遠隔操作

小松製作所・竹中工務店との実証実験では、遠隔地から建設重機を操作するシステムを構築しました。

前述の通り、従来のネットワークでは映像のズレや遅延の揺らぎが生じ「怖くて操作できない」という課題がありました。操作から反応までに要する時間が毎回異なると、精密な作業は困難となります。

しかし、APNによる遅延が確定した環境下では、熟練オペレーターが「現地にいるのと変わらない」感覚で操作できることが実証されました。これにより、危険な現場への派遣が不要になるだけでなく、一人のオペレーターが複数の重機を切り替えて操作することが可能となり、深刻な労働力不足の解消につながると期待されています。

②医療：クラウド内視鏡と遠隔手術

医療分野では、オリンパスとの「クラウド内視鏡」の実証が進んでいます。

医師の目視確認に加え、AIによる画像解析で診断をサポートしてくれる内視鏡がすでに実用化されていますが、これには高性能な処理装置を各内視鏡に搭載する必要があり、コストが課

題となっていました。

そこで、内視鏡の映像を低遅延のAPNでデータセンターに送り、クラウド上のGPUで画像解析をすることで、内視鏡に高価な処理装置を搭載しなくても、医師が手元で操作している映像と、AIの解析結果がズレることなく瞬時に表示されるようになります。

また、国産遠隔手術ロボット「hinotori」を用いた、弘前大学医学部附属病院〜つがる総合病院間、約30kmにわたる遠隔手術の実証実験でも、執刀医から「遅延が確定していれば、メスを入れるタイミングが予測できるため問題なく使える」との高い評価を得ているそうです。

将来、地方にいながらにして、東京や大阪にしかいないスーパードクターの手術を受けられるようになるかもしれません。

③放送：中継車が不要に

TBSとの実証では、スタジアムと放送センター間をAPNで直結し、現地に中継車を出さずに番組制作を行う「リモートプロダクション」に成功しました。

従来、スポーツ中継などでは遅延を避けるため、現地に数億円規模の中継車と大勢のスタッフを派遣し、その場でスイッチングや編集を行い、編集後の映像データを放送局へ送っていました。

今回の実証では、各カメラ映像やマイク音声をすべて非圧縮で赤坂の放送センターへ伝送し、局側で編集を行ったのです。APNの大容量・低遅延性により、局内にいながらにして現地と変わらない制作環境を実現し、放送業界のコスト構造を劇的に変革する可能性が見えてきました。

④金融：1秒以下のシステム切り替え

三菱UFJ銀行との実証では、災害時やサイバー攻撃時を想定したデータセンター間のシステム移行にAPNを活用することで、移行時のシステム停止時間を「1秒以下」に抑えることに成功しました。

従来、稼働ロケーションの切り替えには長時間を要しましたが、APNによる高速同期により、金融システムのようなミツ

ションクリティカルな領域でも、瞬時の復旧が可能になります。

⑤国際接続：セキュア・データスペース

IOWNは国内にとどまりません。すでに日本と台湾の間、約3,000kmがAPNで結ばれ、わずか約17msecの超低遅延での接続に成功。商用運用がはじまっています。これにより、海外のデータセンターをあたかも国内のLAN内にあるかのように扱えるようになります。

例えば、機密性の高いデータは自社のオンプレミスに残し、計算リソース（GPU）だけを海外のクラウドから調達するといった「セキュア・データスペース」の構築が可能になります。

インターネットのようなTCP/IPプロトコルに縛られず、プロトコルフリーで直接接続できる点もセキュリティ上の強みであり、新たなハイブリッドクラウドの形が示されました。



「ネオクラウド」と分散型コンピューティング

川添氏が特に強調したのが、データセンターとクラウドのあり方の変化です。

現在、AWSやAzureといったハイパースケーラーに加え、特定のAI処理に特化した「ネオクラウド」と呼ばれる比較的小規模なデータセンター・クラウド事業者が急増しています。今後は、単一の巨大データセンターですべてを処理するのではなく、ハイパースケーラー、ネオクラウド、そしてオンプレミス

IWON は日本の最後の武器、最後のチャンスかもしれない

をAPNで動的に接続し、必要な時に必要なGPUリソースを調達する「DCI (Data Centric Infrastructure)」の時代が到来するでしょう。

実際に行われた検証では、地理的に分散したデータセンターにあるGPUをAPNで接続し、一つの巨大なコンピュータとしてAI学習を行わせました。その結果、同一ロケーションにある場合と比較して、学習時間はわずか1.006倍にとどまったのです。インターネット経由では約29倍の時間がかかり実用的ではなかったことと比較すれば、その革新性は明らかでしょう。

「これまでNTTは人と人をつなぐ、物と物をつなぐという事で、さまざまなネットワークサービスをご提供してきましたが、これからはAIとAIをつなぐネットワークが必要となります。その時には、人間のために作られたインターネットプロトコルでは不十分かもしれません」。川添氏のこの指摘は、ネットワークの概念そのものの再定義を促すものでした。

この分散型コンピューティングは、エネルギー問題の解決策とも直結します。「電気を運ぶよりも、情報を運ぶ方がロスが少ない」。川添氏はそう語り、電力とデータの連携（ワット・ビット連携）の重要性を説きます。

例えば、再生可能エネルギーが豊富な地方にデータセンターを配置し、都市部から光ネットワークでデータを送って処理させる。あるいは、天候によって発電量が変動する再エネの状況に合わせて、処理を行うデータセンターを瞬時に切り替えるといった運用が可能になるのです。

実際に大阪〜福岡のデータセンター間で行った実証では、再生エネ利用率を最大31%向上させることに成功しています。



AIの進化と「デジタル超越」への展望

講演の終盤、川添氏はIOWNの先にある未来、AIの進化と「デジタル超越」というテーマについて語りました。

現在の生成AIは、人間が作ったデジタルデータを学習した「人間中心モデル」です。しかし、それだけでは未知のウイルス変異のメカニズムや、複雑な自然現象は解明できないかもし

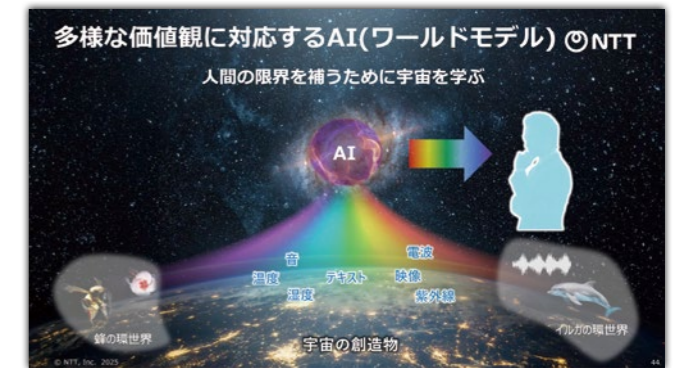
れません。

これに対し、地球・宇宙・ゲノム情報といった、人間が知覚しきれない情報までを含めた、多様な価値観に対応するAIを、NTTは「ワールドモデル」と定義しています。

ゲノム情報は、これまで人間が作り出したすべてのデジタルデータを合計した数十兆倍の規模があるともいわれています。これを処理するには、現在のTransformer（機械学習モデル）とは異なる新たなアルゴリズムと、IOWNのような圧倒的なインフラが不可欠となるでしょう。

現在、NTTでは豊田自動車と協業し、このワールドモデルを使用して事故ゼロを目指した究極の自動運転AIを開発しているといいます。そのためには、路面のすべりやすさ、タイヤやエンジンの状態、気候はどうなっているのかなど、インターネット上にはない情報も含めて学習しないと対応できません。

未来のAIが扱う情報は、デジタルでは捉えきれない「デジタル超越」のレベルにまで広がっていくことが予想されました。



IOWNは「グローバル標準」へ

IOWN構想は、当初の夢物語から、具体的な技術仕様、製品、そして実用ケースを伴うフェーズへと移行しました。すでに2025年の大阪・関西万博では、IOWNが会場に敷き詰められ、パビリオンの演出や遠隔操作など、その威力が世界にお披露目されています。

川添氏は、IOWN Global Forumが175機関にまで拡大し、デファクトスタンダードの形成が進む一方で、ITU-Tにおけるデジュールスタンダード（公的標準）化も並行して進めていると語りました。

ハードウェア（光電融合デバイス）の革命からはじまり、ネットワークアーキテクチャ（APN）の刷新、そしてAIや量子計算といった上位レイヤーの進化までを包括するIOWN。「日本の最後の武器、最後のチャンスかもしれない」と語る通り、この日本発の巨大なエコシステムが、世界の産業地図を塗り替えようとしています。



情報通信行政をめぐる最近の情勢

総務省 情報流通行政局
情報通信政策課長

中村 裕治
YUJI NAKAMURA

記念講演(3)では、日本の情報通信行政のキーマンである総務省 情報流通行政局 情報通信政策課長の中村裕治氏が登壇。本講演において中村氏は、少子高齢化やデジタル赤字の拡大といった日本が直面する構造的な課題を冷静に分析した上で、2030年を見据えた国家戦略「DX・イノベーション加速化プラン」や、来年度（2026年度）に向けた予算重点施策について詳細に語りました。

ICT 産業は国内市場だけでなく海外需要を積極的に取り入れるべき

情報通信を取り巻く「光と影」

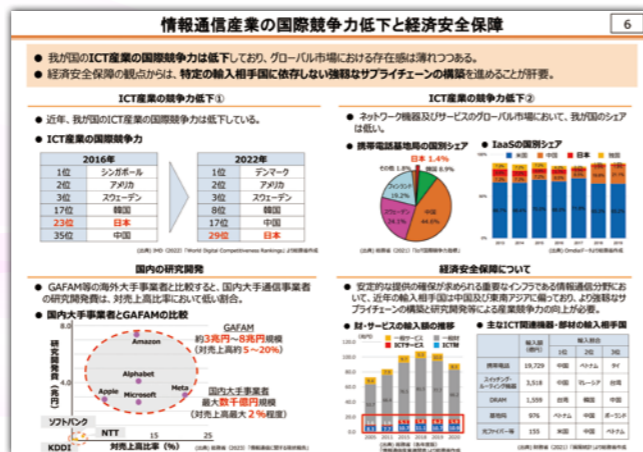
講演の冒頭、中村氏はまず日本を取り巻くマクロな社会環境について触れました。少子高齢化の進行は止まらず、2050年には生産年齢人口が5,000万人まで減少すると予測されています。さらに、日本の相対的な経済的地位の低下、自然災害リスクの高まり、そして厳しさを増す安全保障情勢など、我々の前には多くの困難が立ちはだかっているのです。

しかし、そうした逆風の中にあっても、情報通信（ICT）分野には希望の光があります。中村氏は日本のインフラの現状について、「固定系ブロードバンドにおける光ファイバーの割合は世界トップクラスであり、モバイルブロードバンドの普及率についても胸を張れる状況にある」と評価しました。さらに近年では、衛星コンステレーションや成層圏を飛行する高高度プラットフォーム（HAPS）等の非地上系ネットワーク（NTN）の実用化が進み、コロナ禍や地球温暖化対策を背景としたGXやDXの流れも着実に社会に浸透しつつあります。

特に強調されたのは、ICT産業が経済全体に与えるインパ

クトの大きさです。ICT投資の乗数効果は他産業と比較しても非常に大きく、GDP成長に与える影響も依然として強大です。

2000年頃までは、電話・メタル回線中心だったネットワーク技術も、IP化、ブロードバンド化、モバイル化、クラウド化……と進化を遂げており、生成AIの普及も相まって、流通するデータ量は今後5年で約3倍に急増すると見込まれています。有線にしろ、無線にしろ、この「データ爆発」を支えるイン



フラ需要は、今後も拡大の一途をたどるでしょう。

一方で、直視しなければならない厳しい現実も存在します。中村氏は、日本のICT産業の国際競争力が世界30位前後に低迷している現状を指摘しました。携帯電話基地局の国別シェアにおける日本企業のシェアはわずか1%程度にとどまり、世界的な存在感を発揮できているとは言い難い状況です。研究開発投資費においても、GAFAMなどの海外巨大テック企業と国内事業者の間には大きな開きがあります。

さらに深刻なのが「デジタル赤字」の問題です。2024年のデジタル赤字は約6.7兆円に達し、前年比で約1兆円も拡大しています。また、安定的な提供の確保が求められる重要なインフラである情報通信関連の輸入相手国が、中国や東南アジアに偏っていることは、経済安全保障上のリスク要因ともなり得ます。

中村氏は「ICT産業を伸ばしていくためには国内市場にとどまらず、海外需要を積極的に取り込んでいくことが必須条件である」と強い危機感を示しました。

「DX・イノベーション加速化プラン 2030」

こうした課題を打破するため、総務省が2025年5月に発表したのが「DX・イノベーション加速化プラン2030」です。このプランは、光電融合技術を活用した「オール光ネットワーク（APN）」を中核に据え、「デジタルインフラの整備」と「国際競争力の強化・海外展開」を両輪として進める野心的な戦略です。



① デジタルインフラ整備計画2030

一つ目の柱であるインフラ整備においては、2030年を見据えた具体的なロードマップが描かれています。

データセンターと海底ケーブルの地方分散：東京・大阪への一極集中を是正し、地方でのAI利用基盤を整備する。

オール光ネットワーク（APN）の実装：低遅延・低消費電力

デジタルインフラ整備と国際競争力強化・海外展開を両輪で進める

を実現する次世代インフラを社会実装する。

量子暗号通信：強力なセキュリティ技術である量子暗号の社会実装を進める。

光ファイバー：未整備地域を解消し、整備されたネットワークをあらゆる政策手段によって維持する。

モバイルネットワーク：5Gならではのサービス展開を加速させるとともに、非居住地域を含めた通信環境の確保を目指す。

非地上系ネットワーク（NTN）：衛星通信、HAPS等を活用し、離島や海上、山間部を含むあらゆる場所で高度な通信サービスが利用できる環境を実現する。

② デジタル海外展開総合戦略2030

二つ目の柱である海外展開においては、「グローバルファースト」「マーケットイン」「同志国との連携強化」という三つの指針が掲げられました。ここでは、2030年に向けた具体的な数値目標が設定されている点が注目されます。

海底ケーブル：グローバルシェア35%を目指し、自律的な供給体制を維持する。

モバイル（Open RAN）：オープンな無線アクセスネットワーク市場において上位シェアを確保する。

オール光ネットワーク：ハイパースケーラー等への導入を進め、ハイエンド市場で世界トップ3を確保する。

データセンター：APNとパッケージで展開し、全世界で20%以上のシェアを獲得する。

量子暗号通信：国産の量子暗号通信装置が世界20カ国以上で採用されることを目指す。

すでにNTTによる東南アジアでの光海底ケーブル事業や、KDDIのデータセンター事業（TELEHOUSE）、楽天シンフォニーによるOpen RANの海外展開など、成功事例は生まれつつあります。中村氏は、これらの動きを「点」で終わらせず、メーカー、サービスプロバイダー、通信事業者が一体となった「オールジャパン」体制で世界市場へ挑む必要性を説きました。

過去最大規模を狙う「2026年度予算重点施策」

続いて中村氏は「総務省重点施策2026」について解説を行いました。総務省全体での予算要求額は1,520億円超に加え、金額を示さない「事項要求」が含まれており、令和7年度（2025年度）の1,260億円を大幅に上回る規模での確保を目指しています。中村氏は「補正予算や来年度当初予算を活用し、これまでにない規模での予算獲得にこだわりたい」と意欲を見せました。

情報通信分野における主な柱は以下の5点です。

活力ある地域社会の実現：AI社会を支えるインフラ整備と地域DXの推進。

信頼できる情報通信環境の整備：偽・誤情報対策やサイバーセキュリティ・IoTセキュリティ対策の強力な推進。

防災・減災、国土強靱化：通信・放送インフラの耐災害性向上。

国際競争力の強化・経済安全保障：ICTを牽引役とした海外展開やAI開発力の強化。放送・配信コンテンツの制作力強化・海外展開推進。

社会基盤の確保：郵便局ネットワークの活用等。

変革を促す個別具体的施策

ここからは、講演後半で紹介された具体的な施策について、ICTビジネスに直結する重要トピックを深掘りします。

①「ワット・ビット連携」によるデータセンター分散

データ需要の爆発的増加に伴い、データセンターの電力消費と立地問題が深刻化しています。現在、国内データセンターの約9割が東京圏・大阪圏に集中しており、災害リスクや電力供給の観点から極めて脆弱です。また、電力系統の整備には時間がかかるため、データセンターの新設が追いつかないという課題もあります。

そこで総務省が経済産業省と連携して推進するのが、電力（ワット）とデータ（ビット）を融合させる「ワット・ビット連携」です。これは、再エネが豊富な地域や電力系統に余裕のある地域へデータセンターを分散配置し、同時に海底ケーブルの地方陸揚げを推進する施策です。2026年度予算では、APNを活用したデータセンターの分散運用や、余剰電力を活用するための「ワークロードシフト（計算処理の場所を移動させる技術）」の実証事業などに27億円を要求しています。これは、エネルギーの地産地消とデジタルインフラの強靱化を同時に達成し、地方創生の起爆剤とすることを目指すものです。

②「地域社会DX推進パッケージ」で自治体を支援

「DXを進めたいが、金がない、人がいない、ノウハウがない」——多くの自治体が抱えるこの三重苦を解決するために用意されたのが「地域社会DX推進パッケージ事業」です。本事業は、自治体のフェーズに応じたきめ細やかな支援メニューを提供します。

デジタル人材/体制の確保支援：何から手をつけてよいか分からない自治体には、計画策定支援や「地域情報化アドバイ

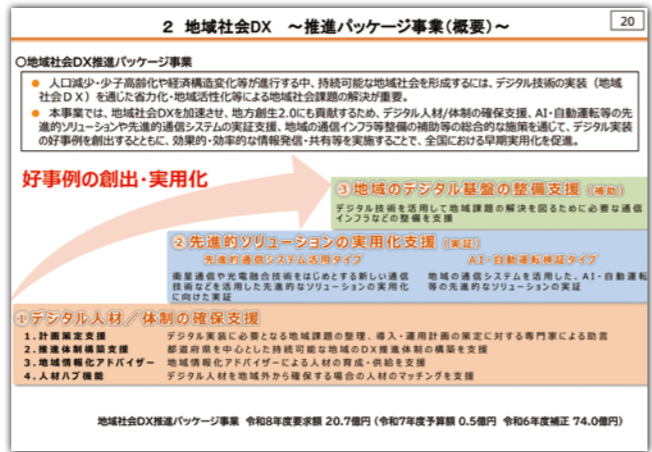
ザー」の派遣を行う。

先進的ソリューションの実用化支援（実証）：AI、自動運転などの先進技術を地域で試すための実証事業を支援する。

地域のデジタル基盤の整備支援（補助）：実装段階に入った自治体に対し、インフラ整備を補助金などの形で支援する。

中村氏は具体的な成功事例として、AI画像認識を用いたスマート漁業（センサーで魚体サイズや食欲を測定し、給餌や出荷を最適化）や、鉄道車両への高精細カメラ搭載による線路点検の自動化、離島における高精細映像を用いた遠隔診療などを挙げました。これらはすでに実証を超え、社会課題解決の実装フェーズに入っています。

本パッケージの公募は今年度内にも開始される見込みであり、ベンダーにとっても大きなビジネスチャンスとなることでしょう。



③デジタル空間の「健全性」の確保

インターネット上の誹謗中傷、偽・誤情報の拡散、著名人になりすました詐欺広告などは、看過できない社会問題です。総務省への相談件数も右肩上がりが増えてしています。

これに対し、総務省は制度対応・リテラシー向上・技術開発の三位一体で対策を進めています。

制度面では、「情報流通プラットフォーム対処法（情プラ法）」が2025年4月に施行され、大規模プラットフォーム事業者に対し、削除申請への迅速な対応や運用状況の透明化が義務付けられました。リテラシー面では2025年1月より、官民が連携した意識啓発プロジェクト「DIGITAL POSITIVE ACTION」が始動しています。技術面では、ディープフェイクを見破るための技術開発予算も計上。画像のヒートマップ解析で改ざん箇所を特定する技術など、高度化するフェイク技術に対抗する手段を開発し、デジタル空間の健全性を確保します。

日本成長戦略の一つとして位置づけられる「情報通信」

④オール光ネットワーク（APN）のオープン化

IOWN構想の中核をなすAPNについては、通信キャリアだけでなく、データセンター事業者、学術機関、デベロッパーなど多様なプレイヤーが参加できる環境構築を目指しています。2024年度からは、異なる事業者が運用するAPNを相互接続するための共通基盤技術の研究開発が進行。総務省は、実環境を模した検証の場（イノベーションハブ）を用意し、多様なユースケースの創出を後押しします。これにより、日本が強みを持つ光通信技術の社会実装と海外展開を加速させる構えです。

⑤衛星コンステレーションの「自律性」確保

能登半島地震の際、通信途絶エリアの救済にスターリンク等の衛星通信が活躍したことは記憶に新しいですが、中村氏は「米国のシステムだけに依存しては、経済安全保障上の自律性が確保できない」と警鐘を鳴らしました。有事の際や災害時においても、日本が主体的に管理・コントロールできる衛星通信インフラを持つことは必須です。そのため総務省は、日本国内で責任を持って運用管理される衛星コンステレーションサービスの提供を目指す事業者に対し、積極的な支援・補助を行う方針です。農業や条件不利地域でのインフラ監視など、平時におけるユースケース開拓も並行して進められます。

⑥その他の重要施策：自動運転、人材、強靱化

その他にも、多岐にわたる施策が紹介されました。自動運転の社会実装：自動運転に必要な周波数の割当整理や、高速道路等における5G SA（Stand Alone）環境の整備を進めます。情報通信エンジニアリング業界の支援：インフラ構築を担う現場の人手不足や労働環境改善に向けた支援を行います。サイバーセキュリティ人材育成：国が演習プログラムを提供し、自治体や企業の対処能力を向上させます。

インフラ強靱化：能登半島地震の教訓を踏まえ、基地局への長時間バッテリー配備や、伝送路断絶時に衛星回線へ自動切り替えを行う機能への補助を行います。

高市政権下の「日本成長戦略本部」への期待

講演の最後、中村氏は2025年11月に高市政権下で立ち上がった「日本成長戦略本部」について言及しました。ここでは「危機管理投資」と「成長投資」をキーワードに、AI・半導体、量子、宇宙など17の戦略分野が選定されており、「情報通信」もその一つとして明確に位置づけられています。

【最近のトピック】日本成長戦略本部（11月4日設置） 成長戦略の検討課題 48	
1. 「危機管理投資」、「成長投資」の戦略分野	
AI・半導体	内閣府特命担当大臣(人工知能戦略)/経済産業大臣
造船	国土交通大臣/内閣府特命担当大臣(経済安全保障)
量子	内閣府特命担当大臣(科学技術政策)
合成生物学・バイオ	経済産業大臣
航空・宇宙	内閣府特命担当大臣(経済安全保障)
デジタル・サイバーセキュリティ	内閣府特命担当大臣(デジタル大臣)
コンテンツ	内閣府特命担当大臣(クールジャパン)
フードテック	農林水産大臣
グリーンエネルギー	経済産業大臣
防災・国土強靱化	国土強靱化担当大臣
創薬・先端医療	内閣府特命担当大臣(科学技術政策)/デジタル大臣
フュージョンエネルギー	内閣府特命担当大臣(科学技術政策)
マテリアル(重要鉱物・部材)	経済産業大臣
港湾ロジスティクス	国土交通大臣
防衛産業	経済産業大臣/防衛大臣
情報通信	総務大臣
海洋	内閣府特命担当大臣(海洋政策)
2. 分野横断的課題	
新技術立国・競争力強化	経済産業大臣
人材育成	文部科学大臣
スタートアップ	スタートアップ担当大臣
金融を通じた潜在力の解放	内閣府特命担当大臣(金融)
労働市場改革	厚生労働大臣
介護、育児等の外部化	日本成長戦略担当大臣
買上げ環境整備(※)	買上げ環境整備担当大臣
※中小等の生産性向上・事業承継・M&A等	サイバー安全保障担当大臣
サイバーセキュリティ	

今後は、分野ごとに担当大臣を明確化し、省庁の垣根を越えた連携によって、官民挙げた投資と成長戦略が描かれることとなります。中村氏は「複雑化する国際情勢の中で、経済安全保障を確保しつつ、ICTを日本の成長エンジンにしていこうためのシナリオ作りを進めたい」と力を込めました。

総務省 情報通信政策課長としての中村氏の言葉からは、日本のICT産業が直面する危機感とともに、それを技術力と戦略で乗り越えようとする強い意志が感じられました。2026年度に向けて動き出す数々の施策は、日本のICT産業にとって再起をかけた重要なステップとなることでしょう。



功労表彰式

「功労表彰式」には、ASPIC会員を中心に約90名が参加。河合会長のご挨拶に続いて、日頃よりご指導をいただいている総務省情報流通行政局情報流通振興課長の大澤健様より、心のコもったご来賓祝辞を頂戴しました。

表彰式では、河合会長から受賞者一人ひとりに賞状と記念品が手渡され、記念写真を撮影。

全表彰の終了後、受賞者代表として株式会社ユー・エス・イー代表取締役会長の吉弘京子様（ASPIC執行役員）、ならびに受賞企業代表としてNTTドコモビジネス株式会社ビジネスソリューション本部第二ビジネスソリューション部担当部長の和泉雅彦様（ASPIC理事）が登壇し、受賞の喜びと謝意が語られました。

式典の末尾には、大澤課長にも加わっていただき、受賞者全員で集合写真の撮影を実施。協会のこれまでの歩みを、支えてくださった功労者一人ひとりと共有する、印象的なひと時となりました。

式典の末尾には、大澤課長にも加わっていただき、受賞者全員で集合写真の撮影を実施。協会のこれまでの歩みを、支えてくださった功労者一人ひとりと共有する、印象的なひと時となりました。



河合 輝欣会長挨拶



この「功労表彰式」は、長年にわたりASPICの拡大・発展に尽力し、クラウド業界の成長を支えてこられた理事・役員、ならびに会員の皆さまへの、協会からの心よりの感謝の念をお示しするために、25年間の歴史で初めて実施するものです。

今回は、理事・役員の皆さまを「創業期からの功労」「事業展開期からの功労」「永年にわたる功労」の3つの区分に分け、計28名を顕彰。併せて、会員企業の皆さまにつきましては、「創業期からの功労」「事業展開期からの功労」「永年にわたる功労」の3区分にて、

29社を表彰いたします。

思い返せば、ASPICの四半世紀の歩みは、決して平たんなものではありませんでした。一時は会員数が大きく減少し、『このまま協会を続けていけるのだろうか』と不安を抱いた時期もありました。そうした中で歯を食いしばり、今日まで歩みを進めてこられたのは、ここにお集まりいただいた、理事・役員、会員の皆さまをはじめ、総務省や関係省庁、大学・学術機関、関係団体の皆さまから賜ったご指導とご支援のおかげです。ここに改めて、深い感謝の意を表します。

そして最後に、本日受賞された各位に申し上げたいのは、「この表彰は決してゴールではなく、今後も会員の皆さまと共に歩み続けていくための一つの節目です」ということです。ASPIC一同、これからも、皆さまからのご指導、ご支援、そして忌憚のないご意見を賜りながら、協会と会員企業のさらなる発展に尽力してまいります。どうぞ引き続き、よろしくお願い申し上げます。

総務省 情報流通行政局 情報流通振興課長

大澤 健
KEN OSAWA

2000年、東大経済学部卒業後、郵政省（当時）に入省。総務省情報通信国際戦略局参事官補佐（通信・放送総合戦略担当）、在英日本国大使館一等書記官、総務省国際放送推進室長、総務大臣秘書官、デジタル庁戦略・組織グループ参事官などを経て、2023年より総務省情報流通行政局情報流通振興課長。

長年にわたるクラウドサービスの安心・安全な活用に関する貢献に感謝するとともに、今後のますますの発展を祈念いたします

ASPIC 創立 25 周年という記念すべき節目にあたり、本日、功労表彰式が開催されますことを、心よりお祝い申し上げます。このような場において祝辞を述べる機会を賜りましたことを、大変光栄に存じます。

本日の功労表彰式では、20 年以上、15 年以上、そして 10 年以上にわたり、ASPIC ならびにクラウド業界の発展にご尽力されてきた 28 名の理事・役員の皆さま、さらに 29 社の会員企業の皆さまが表彰されると伺っております。長年にわたる多大なご貢献に、心より敬意を表するとともに、受賞される皆さまにお祝いを申し上げます。

ASPIC は、これまで「ASPIC クラウドアワード」の開催を通じて、クラウド業界全体の活性化に寄与されてきました。それだけでなく、「クラウドサービスの安全・信頼性に係る情報開示認定制度」の推進などを通じ、クラウドサービスを安心・安全に活用できる環境づくりに大きく貢献されてきました。これらの取り組みは、わが国のクラウド産業の健全な発展において、極めて重要な役割を果たしてきたものと認識しております。

ASPIC と総務省は、これまで同じ方向を向きながら、良好な協力関係を築いてまいりました。その一例として、先ほど会長からもご紹介がありました情報開示認定制度においては、認定の付与にあたり、総務省が公表している「クラウドサービスの安全・信頼性に係る情報開示指針」を参考にして

いただいております。

今後、生成 AI をはじめとする新たな技術の進展や、それに伴うさまざまな課題を背景に、クラウドサービスを取り巻く環境は、さらに大きく変化していくことが見込まれます。そのような中において、安心・安全なクラウドサービス環境の構築において、ASPIC および関係者の皆さまが果たされる役割は、今後ますます重要性を増していくものと考えております。引き続き、さらなるご貢献に大いに期待を寄せております。

結びにあたり、河合会長をはじめ、本日で参集の皆さま方のこれまでのご尽力に対し、改めて深い敬意と感謝を申し上げますとともに、今後のさらなるご発展を祈念いたしまして、私からの祝辞とさせていただきます。

本日は誠にありがとうございます。

ASPIC 執行役員
株式会社ユー・エス・イー 代表取締役会長

吉弘 京子

KYOKO YOSHIHIRO



ASPIC 理事
NTT ドコモビジネス株式会社
第二ビジネスソリューション部 ビジネスデザイン部門 担当部長

和泉 雅彦

MASAHIKO IZUMI

クラウドで社会を変えるために走ってこられた、河合会長の強烈なリーダーシップに感動しながらついてまいりました

ASPIC が創立 25 周年という大きな節目を迎えられたことを、心よりお祝い申し上げます。もっとも、これは 1 つの通過点であり、まさに「これから」が本番であるとも感じております。

私は、河合会長が創立当初より、ものすごいエネルギーと強烈なリーダーシップをもって ASPIC を率いてこられた姿を、間近で拝見してきました。同時に、まだ「クラウド」という言葉が存在せず、ASP という概念すら一般的ではなかった時代から、数多くの困難に直面しながら歩みを進めてこられたご苦勞の軌跡も、つぶさに見てまいりました。

設立当時、クラウドの考え方はすぐに世の中に受け入れられたわけではなく、その道のりは決して平たんなものではありませんでした。そのような中で、会長は「これからの時代を必ず変えていくのだ」「この取り組みは不可欠なのだ」という強い信念をもって、先頭に立って走り続けてこられたのです。

NTT データの副社長を務めておられた頃から、常に誰よりも早く次の時代を見据え、さまざまな取り組みを先行して進めてこられた会長に、私はただ尊敬の念を抱きながら、ついていくばかりでした。そのような方がこの協会を立ち上げると聞いたとき、「いよいよ始まるのだな」という思いを抱いたことを、今でもよく覚えています。

その後は、さまざまな企業を巻き込みながら、強いリーダーシップで活動をまとめ上げていく姿をそばで仰ぎつつ、感動しながら歩みを共にさせていただいた、というのが正直な感想です。25 周年、正確には 26 年目を迎えた今、ここまで築き上げてこられたものの大きさを改めて感じています。

これまでの ASPIC の活動が礎となり、IT 業界はもとより、社会全体は大きく変化してきました。そして今、いよいよ AI の時代を迎えています。先ほど会長も、「AI に関連する新たなビジネス」について検討を進めていくと述べられておられました。

一方で、AI がすでに誰もが使える技術となる中、私たち IT 業界で経営に携わる立場としては、AI をどのように活用し、サービスを創り出し、競争力を高めていくのかという点が、極めて大きな課題となっています。

この 1 年半ほどを振り返っても、「どう生き残るか」を真剣に考えざるを得ないほど、厳しく、変化の激しい時代です。そのような中で、ASPIC がどのように世の中をリードし、さまざまな研究会やグループを立ち上げながら、業界と社会に貢献していくのか、大きな期待を寄せています。

河合会長におかれましては、どうぞご自身のお体を第一にお考えいただきながら、これからもご活躍いただければと思います。私たちの業界全体で ASPIC を応援し、さらに発展させていくことが、日本の企業が世界で戦っていく力につながると確信しています。

最後に ASPIC のますますのご活躍を祈念するとともに、私どもも引き続き一緒に歩ませていただきたいと強く思っております。

本日は誠にありがとうございました。そして、25 周年、誠におめでとうございました。

ASP・SaaS から AI まで、“ASPIC”の 5 文字は ICT の無限の可能性を秘めたマジックワードです

ASPIC 創立 25 周年という記念すべき節目の年に、会員表彰という栄えある機会を賜り、誠にありがとうございます。ASPIC の長い歴史の中で、新たな一歩となるこの表彰をいただいたことを、大変光栄に思っております。本日は、受賞された 29 社を代表し、厚く御礼申し上げます。

改めまして、河合会長、ASPIC 創立 25 周年、誠におめでとうございます。四半世紀にわたる活動の中で、常に市場や技術動向と向き合い、社会の要請に応えながら活動領域を広げてこられたことに、深い敬意を表します。ASPIC は、日本のクラウド産業の発展に大きく貢献するとともに、官民双方において豊かな成果を上げてこられました。また、会長の旭日小綬章の叙勲に関する活動をはじめとする、執行部ならびに事務局の皆さまのご尽力にも、改めて感謝と敬意を申し上げます。

弊社は今年、社名を NTT ドコモビジネスへと変更し、法人ビジネスにおける DX 提案に一層注力しております。前身の NTT コミュニケーションズ時代から通算 20 年間、法人会員として ASPIC に参画し、ASPIC クラウドアワードのプロモーション、AI やセキュリティ分科会への参加、ビジネスセミナーを通じた DX 推進やスマートライフの啓発など、さまざまな取り組みをご一緒してまいりました。

中でも印象深いのが、カタカナ「アスピック」立ち上げ時の取り組みです。SEM に適した多数の商材をエントリーさせていただき、アスピックの活動を支える基盤づくりに、わずかながらでも貢献できたのではないかと誇りに感じています。また、ASPIC から継続的にいただいたご支援は、弊社の成長や事業発展にとって大きな力となりました。

河合会長のお話にもありましたが、「ASPIC」という 5 文字のアルファベットには、無限の可能性が込められていると感じています。ASP・SaaS から始まり、PaaS の「P」、IaaS の「I」、クラウドの「C」、そして AI の「A」や IoT の「I」、さらにはクラウド検定のサーティフィケーションの「C」まで、そのすべてがこの 5 文字でつながっています。今後は、サイバーの「C」やセキュリティ、さらには宇宙（スペース）や衛星（サテライト）の「S」といった新たな分野へも広がっていくことでしょう。この名称に込められた先見性に、改めて感服するとともに、命名した「河合会長は天才なのでは」とも思っております（笑）。

コロナ禍を経た働き方の変化、AI の急速な普及、サイバーセキュリティを巡る課題など、社会環境は大きく変化しています。そのような時代において、「安心・安全なクラウドサービスの推進」を掲げる ASPIC の役割は、ますます重要になると考えています。私たちがオールジャパン、ワンチームの一員として、知恵を出し合いながら、社会に貢献してまいります。

河合会長をはじめ ASPIC の皆さま、会員企業の皆さま、そして日頃よりご支援をいただいている総務省の皆さま方に、今後とも変わらぬご指導、ご鞭撻をお願い申し上げます。本日は誠にありがとうございました。



理事・役員 功労表彰



会員 功労表彰





創業期からの功労



株式会社ユー・エス・イー
吉弘 京子



協栄 IT& ビジネスサービス株式会社
小田島 労



株式会社ネオジャパン
狩野 英樹



日本情報通信株式会社
中山 幹公



荒牧 伸一



株式会社セールスフォース・ジャパン
伊藤 孝

事業展開期からの功労



スパイラル株式会社
藤井 博之



合同会社 三笠ポリシアードバイザリ
三笠 武則



株式会社ネオレックス
駒井 拓央



株式会社寺崎信夫技術士事務所
寺崎 信夫



日鉄ソリューションズ株式会社
荻窪 雅郎



NTT ドコモビジネス株式会社
和泉 雅彦



プロパティデータバンク株式会社
板谷 敏正



コクヨ株式会社
山崎 篤



株式会社 NEUGATE
村松 充雄



株式会社カナミックネットワーク
山本 稔



株式会社 NTT データ経営研究所
村岡 元司



エムシーディースリー株式会社
富加見 順



株式会社 NTT データ経営研究所
松本 良平



富士通株式会社
松原 真弓



株式会社 NTT データアイ
御幡 徳宏



KIRI 北村学際総研
北村 倫夫



株式会社ユー・エス・イー
前田 博隆

永年にわたる功労



Ultra FreakOut 株式会社
宇木 大介



富士通株式会社
相曾 恵一



株式会社内田洋行
木内 麻文



一般社団法人 企業間情報連携推進コンソーシアム
稲葉 慶一郎



プロパティデータバンク株式会社
武野 貞久



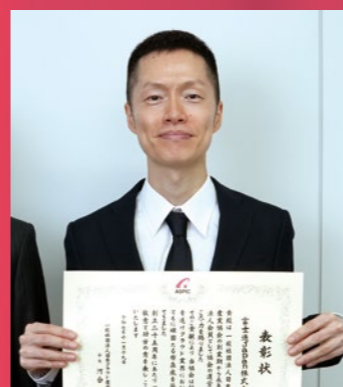
創業期からの功労



日本電気株式会社
(山根 義之)



株式会社 NTT データ
(由見 哲郎)



富士通 Japan 株式会社
(惣山 大輔)



株式会社寺岡精工
(小池 正城)



株式会社ワイズマン
(斉藤 良太)



株式会社アルファシステムズ
(久保田 和弘)



富士通株式会社
(前田 宏二)



株式会社ユー・エス・イー
(吉弘 三男)



株式会社 NTT データアイ
(成田 正人)



株式会社フォーカスシステムズ
(平原 公俊)



NEC ネクサソリューションズ
株式会社

事業展開期からの功労



プロパティデータバンク
株式会社
(大田 武)



エムシーディースリー
株式会社
(中川 貴雄)



株式会社
NTT データフロンティア
(田澤 俊助)



株式会社
NTT データ経営研究所
(田中 公義)



日本電子計算株式会社
(河和 茂)



コンフィデンシャルサービス
株式会社
(北原 彰)



コクヨ株式会社
(山崎 篤)



メシウス株式会社
(市川 利弥)



株式会社ネオレックス
(駒井 拓央)



株式会社
カナミックネットワーク
(山本 拓真)



株式会社
セールスフォース・ジャパン
(伊藤 孝)



NTT ドコモビジネス株式会社
(野本 正樹)



三菱電機デジタル
イノベーション株式会社
(青木 君仁)



日鉄ソリューションズ株式会社
(伊藤 亮平)



株式会社 DNP
デジタルソリューションズ
(有田 博樹)



株式会社パスコ
(松山 利徳)



株式会社 TOKAI
コミュニケーションズ
(兼本 正之)



株式会社ネクスウェイ
(竹野 博敬/幸地 美奈)



株式会社電話放送局
(森 正行)



株式会社石川コンピュータ・センター
(山浦 伯之)



アマノビジネスソリューションズ株式会社
(森田 圭亮/白井 康太)



株式会社コンストラクション・イーシー・ドットコム
(樂山 信幸)



株式会社サパナ
(西岡 洋平)



株式会社インフォーマート
(矢野 勉)



株式会社いい生活
(兼 英樹)



アルプスシステム
インテグレーション株式会社
(佐藤 勇介/吉井 まち子)



ジャパンシステム株式会社
(山際 賢/塩澤 敦)



株式会社内田洋行
(木内 麻文)



株式会社
ヒューアップテクノロジー
(篠川 貴洋)

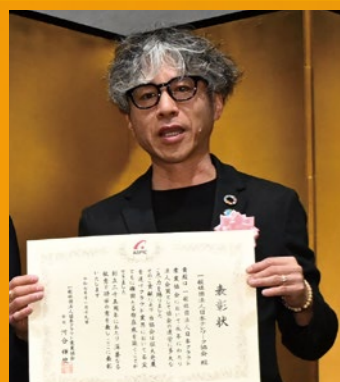
永年にわたる功労



スパイラル株式会社
(金住 主石)



株式会社ソリューション・アンド・テクノロジー
(中山 桂智)



一般社団法人
日本テレワーク協会
(中村 幸弘)



株式会社 NTT データ関西
(丹藤 敏晴)



一般社団法人
認知症高齢者研究所
(羽田野 政治)



株式会社ユービーセキュア
(松田 陽子)

表彰状・記念品



理事・役員 功労表彰



会員 功労表彰



受賞者 記念品



式典参加者等への記念品

第1部「功労表彰」の受賞者には、記念品として、受賞者（受賞社）の名前と ASPIC のロゴをあしらった特製のデジタル時計が贈られました。記念品に時計を選んだのは、日常の中で自然に使っていただける存在であること、そして受賞者の身近な場所で ASPIC のロゴが目に見えることで、協会とのつながりを感じていただきたいとの思いからです。

日々の業務や生活の中で時を刻むこの時計が、これまで ASPIC とともに歩んできた時間と、これからともに進む未来に思いをはせるきっかけとなることを願っております。

25周年記念式典 / 25周年記念号発刊 実施プロセス

検討項目	2025											
	1月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月		
◆25周年記念式典 (11/19)										★		
①全般										11/19		
1 ●開催場所 予約	1月上											
2 ●式典推進プロジェクト 検討・発足	4月上											12月上
3 ●招待者 リストアップ				7月上				9月上				
4 ●開催案内/招待状 作成・印刷						8月下		9月上				
5 ●招待状発送・締め切り							9月上		10月上			
6 ●記念品 選定・発注							9月上			11月上		
7 ●開催運営 直前準備									10月下			当日
②功労表彰												
1 ●功労表彰 選定・決定・案内	4月上									10月上		
2 ●祝辞者 選定・依頼					7月上					10月中		
3 ●記念品 選定・発注・納品								9月上			11月上	
4 ●賞状文案 作成・発注・納品									10月上		11月上	
5 ●タイムテーブル 作成										10月下	11月上	
③記念講演会												
1 ●記念講演会講師 選定・依頼	4月上										10月中	
2 ●祝辞者 選定・依頼					7月上						10月中	
3 ●講演資料入手											11月上	11月中
④御礼・意見交換の会												
1 ●祝辞者 選定・依頼	4月上										10月中	
2 ●タイムテーブル 作成											10月下	11月上
◆25周年記念号「クラウドマガジン」発刊												
1 ●構成・内容 検討・制作	4月上											11月中
2 ●座談会 準備・開催				6月上		7月下						
3 ●寄稿 依頼・受領					6月下							10月中

ASPIC 事務局 お問い合わせ窓口

部門	担当	問い合わせ先
ASPIC 事務局	総合窓口	office@aspicjapan.org 03-6662-6591
総括・総務・経理	高橋 伸之、門井 武司、志柿 隆信 ASPIC に関する全般的なお問い合わせ	takahashi@aspicjapan.org
会員サービス	見目 裕樹、高橋 慎治、花岡 孝義 新規入会申し込み、既存会員の登録変更等のお問い合わせ	kenmoku@aspicjapan.org
情報開示認定	岩田 恵一、池田 幸雄 情報開示認定制度についてのお問い合わせ、お申し込み	iwata@aspicjapan.org aspic@cloud-nintei.org 03-6662-6854
紹介サイト「アスピック」	春日 俊一 「アスピック」掲載のお問い合わせ	kasuga@aspicjapan.org
情報提供	高橋 慎治 (クラウド)、中村 亨 (セキュリティ)、日高 昇治 (AI)、吉田 憲正 (クラウド) ASPIC が行っている情報提供に関するお問い合わせ	shinji.takahashi@aspicjapan.org
新規事業・サービス	中村 亨 (クラウド検定)、宮地 秀親、矢嶋 和也 日本クラウド産業株式会社、「ASPIC クラウドサービス検定」へのお問い合わせ	nakamura@aspicjapan.org

ASPIC 法人会員新規入会企業一覧

▶2025年2月以降にASPIC法人会員へ新規入会された企業の皆さまをご紹介致します。1999年に創立したASPICの会員は2026年1月現在、法人会員、パートナー会員、アワード会員、公共会員、賛助会員、個人会員を合わせて1,400となっております。これからますます会員同士の交流を深め、新たなビジネスチャンスが創出されることを願っています。(アルファベット・50音順)

株式会社 bestiee

150-0043
東京都渋谷区道玄坂 1-10-8
渋谷道玄坂東急ビル 2F-C
☎080-9294-7597 🌐 <https://bestiee.co.jp/>

一般財団法人 全国地域情報化推進協会

102-0073
東京都千代田区九段北 1-2-3
フナトビル5F
☎03-6272-3490 🌐 <https://www.applc.or.jp/>

株式会社 ICEONE

150-0011
東京都渋谷区東 3-22-14
グランファースト恵比寿 7階
☎080-4244-6413 🌐 <https://www.iceone.co.jp/>

データセンタークロスアライアンス

105-0022
東京都港区海岸 1丁目9番1号
浜離宮インターシティ 8F
☎090-6477-6327 🌐 <https://www.dcxa.jp/>

TRUST SOFT 株式会社

108-0071
東京都港区白金台 5-22-11
ソフトタウン白金 501
☎080-5757-3154 🌐 <https://www.trust-soft.co.jp/>

テックタッチ株式会社

104-0061
東京都中央区銀座 8丁目17-1
PMO 銀座II 5階
☎080-4576-6577 🌐 <https://techtouch.jp/>

Ultra FreakOut 株式会社

106-0032
東京都港区六本木 6-3-1
六本木ヒルズクロスポイント 3階
☎080-4778-9766 🌐 <https://ultra-fout.jp/>

株式会社ファインデックス

100-0004
東京都千代田区大手町 1丁目7-2
東京サンケイビル 26階
☎03-6271-8958 🌐 <https://findex.co.jp/>

株式会社クロスパワー

101-0021
東京都千代田区外神田 1丁目16-8
GEEKS AKIHABARA 3階
☎03-5297-4871 🌐 <https://www.x-power.co.jp/>

フリー株式会社

141-0032
東京都品川区大崎 1-2-2
アートヴィレッジ大崎セントラルタワー 21階
☎03-5719-2772 🌐 <https://corp.freee.co.jp/company/>

シスクラウドジャパン株式会社

105-0003
東京都港区西新橋 1-1-1
日比谷 FORT TOWER 10F
☎050-5810-2314 🌐 <https://www.syscloud.com/jp/>

合同会社三笠ポリシーアドバイザー

181-0016
東京都三鷹市深大寺一丁目7番10号
マイキャッスル三鷹南 501号室
☎090-1854-7200

ASPICクラウドサービス情報開示認定 新規認定サービス一覧

▶2025年2月以降にASPICクラウドサービス情報開示認定にて新規認定されたサービスをご紹介します。累積認定サービス数は330サービスを超えております。(アルファベット・50音順)

Compliance Wizard

(東京都港区・株式会社 X-Regulation)

<https://www.x-regulation.com/compliance-wizard>

☎ 03-3528-8809 ✉ info@x-regulation.com

公知の規準に対する自社の規程類の適合状況の評価する、AIが監査手続の提案から監査調査のドラフトまで作成可能なサービス

DocTrack

(東京都新宿区・株式会社シーシー)

<https://doctrack.jp/>

☎ 03-4226-3014 ✉ info@doctrack.jp

PDF資料のWeb形式自動変換、名刺スキャンによる顧客情報登録、メール自動配信、URL閲覧回数・閲覧時間解析機能等を備えたマーケティング支援サービス

FORROU

(愛知県小牧市・株式会社セルス)

<https://www.cells.co.jp/forrou-p/>

各種申請手続きと給与計算機能が一体として利用可能で、Web明細や公文書など顧問先とのリアルタイムな情報共有機能も備えた社労士向けサービス

IHI-WMS Cloud

(大阪府堺市堺区・株式会社 IHI インフラシステム)

https://www.ihico.jp/iis/products/steel_construction/water_management_system/index.html

☎ 03-6204-8502 ✉ iik-mizukanri@ihi-g.com

農業水利施設およびそこを流れる用水・排水を一元管理し、広範囲に点在するポンプ場や分水工などに設置されたポンプ・ゲート・バルブ設備を、遠隔から監視制御できるサービス

iMV cloud

(大阪府大阪市西淀川区・iMV株式会社)

<https://we-are-imv.com/cloud/>

☎ 050-1743-0500 ✉ imv-sc@imv-corp.com

製品などの試験品に振動を与え、製品の損傷や影響、耐久性を調べる振動試験の状況や、結果を遠隔から確認できる振動試験遠隔監視サービス

RISK EYES

(東京都港区・ソーシャルワイヤー株式会社)

<https://www.riskeyes.jp/>

☎ 03-6868-8874 ✉ support@riskeyes.jp

取引先の反社会的勢力との関係性や犯罪関与、不祥事等の情報を、WEBニュース記事、新聞記事などの公知情報から精度高く効率的に確認できるサービス

WAN-RECORD Plus®

(東京都港区・株式会社 NX ワンビシアーカイブズ)

<https://www.wanbishi.co.jp/wan-record-plus/>

☎ 03-5425-5034 ✉ helpdesk@wanbishi.co.jp

コンテンツ登録・検索機能、コンテンツ承認機能、アクセス制御機能、イベントログ管理機能等を備え、電子データのみでなく紙資料所在情報等も一元管理可能なサービス

クオミル クラウドサービス

(東京都港区・テックマトリクス株式会社)

<https://quomiru.com>

✉ quomiru-support@techmatrix.co.jp

ソフトウェア開発で生じる開発アクティビティやソフトウェアメトリクスなどのデータを自動で収集・可視化し、潜在的な課題やリスクの発見を支援するサービス

クラウド ERP システム「SmileWorks」

(東京都千代田区・株式会社スマイルワークス)

<https://www.smile-works.co.jp/>

販売管理・仕入管理・在庫管理・入出金管理・経費精算・給与計算・年末調整・財務会計など、企業のバックオフィス業務を統合して、自動会計仕訳や資金繰り表の自動作成を実現する統合型業務クラウドサービス

サスケ Works

(北海道札幌市・株式会社インターパーク)

<https://works.saaske.com/>

プログラミングスキルや知識がなくても目的に沿って必要なアプリパーツを組み合わせて、生成 AI 機能を使用してアプリを作成でき、作成したアプリをアプリストアで販売することも可能なノーコード WEB アプリ開発プラットフォームサービス

フードバンク業務管理システム

(神奈川県平塚市・株式会社アクアライフ)

<https://www.foodbank.systems/>

☎ 050-1790-1193 ✉ info@foodbank.systems

フードバンク業務に必要な食品の入出庫作業がバーコード利用で簡易に可能で、寄付者・受給者のトレーサ機能も備えたフードバンク特化型の業務管理サービス

フォルシア web コネクト

(東京都新宿区・フォルシア株式会社)

<https://webconnect.forcia.com/>

☎ 03-6457-4240

旅行業界向け Web 販売ビジネス基盤や検索の知見を活かし、料金・在庫がダイナミックに変動する「宿泊素材」、「交通素材」、「着地素材」を組み合わせて動的な商品造成・販売をワンストップで実現できるサービス

最適給与クラウド

(愛知県小牧市・株式会社セルス)

<https://www.saiteki-kyuyo.jp/>

60歳以上の従業員に対する年金や雇用継続給付の情報を基に、企業と従業員双方にとって最適な給与額をシミュレーション可能な社労士向けサービス

総務 DX サービス

(東京都千代田区・コクヨアンドパートナーズ株式会社)

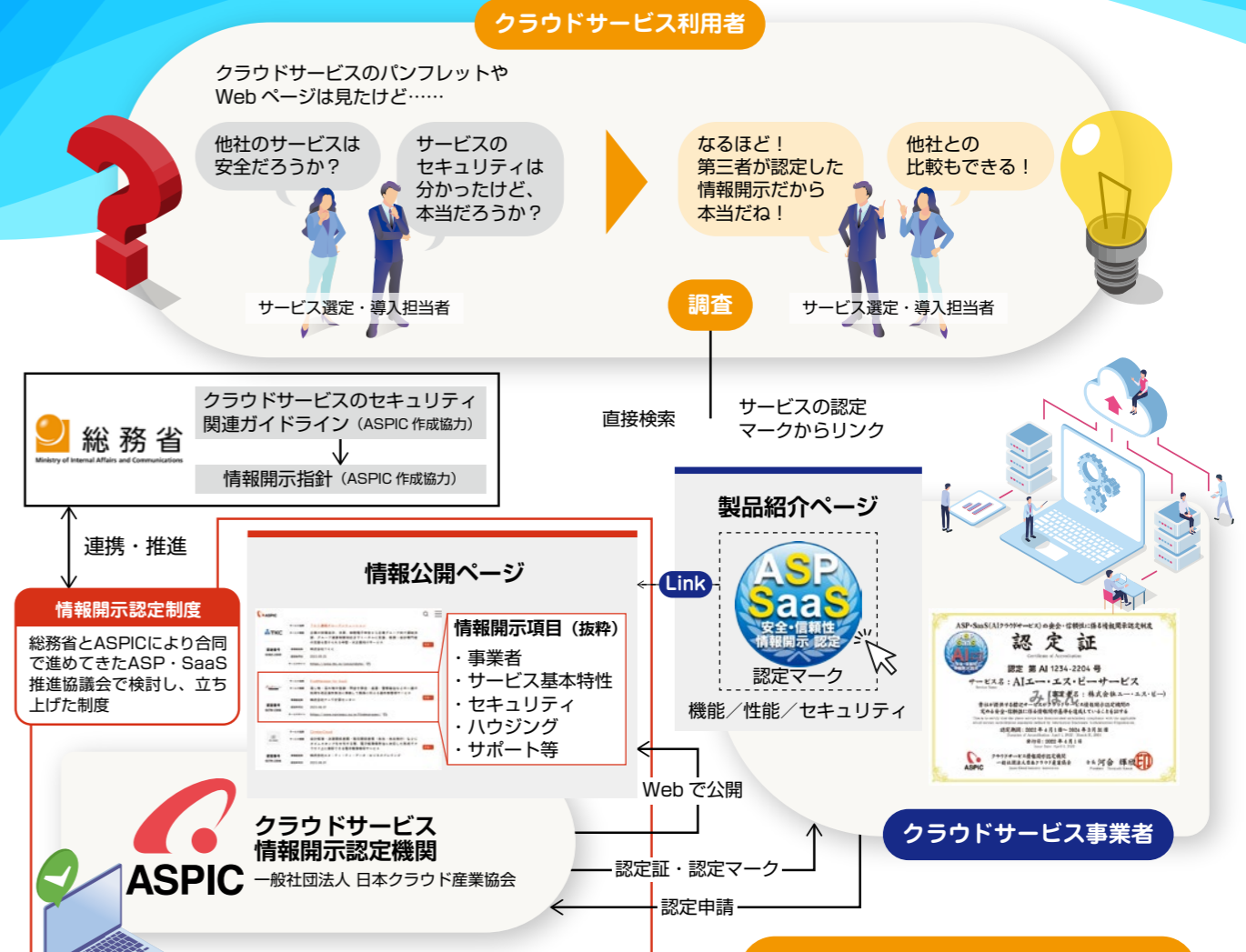
<https://www.kokuyo-partners.co.jp/soumudx/lp/>

✉ support_soumudx@kokuyo.com

各種チャネルからの問合せや申請処理、資産・ID管理などの多様な総務業務に対応し、対応フローの自動化、FAQによる自己解決、ダッシュボードによる可視化機能を備えた、業務の効率化と迅速化を支援する総務業務支援サービス

『情報開示認定』で自社サービスの安全安心をアピール

クラウドサービスの安全・信頼性に係る情報開示認定制度



情報開示制度とは

総務省の情報開示指針をもとに、情報開示認定機関 ASPIC が行う、クラウドサービス提供者が安全性や信頼性に関する情報を適切に開示しているかどうかを評価し、認定する制度です。利用者はサービスの安全性や信頼性について第三者が認定した開示情報をもとに、より安心してクラウドサービスを選ぶことが可能となります。

SaaS 利用者の 44% は情報開示認定を選定条件、もしくは選定時の参考としています。

セキュリティセンターの利用企業・組織を対象とした SaaS のセキュリティに関する情報開示、情報利用の実態調査、独立行政法人情報処理推進機構 (IPA) 2023 年 7 月 24 日より。

認定取得企業の声

- ▶ 第三者機関の認定マークがあることでサービスの信用が高まり、大手企業からの引き合いが増加しました。
- ▶ 会社の ISMS の規定で、新規サービスは「情報開示認定を受けること」という規則を定めており、自社の稼働を大幅に削減できています。
- ▶ 認定取得に向けた説明資料の収集をすることで、情報セキュリティだけでなく、会社全体の仕組みを知ることになり、社員教育にも役立っています。

情報開示認定申請サービス募集中
詳しくは

☎ 03-6662-6854

✉ aspic@cloud-nintei.org

お電話・メールの営業時間
9:30~17:00 (土・日・祝日を除く)

ASPIC 認定



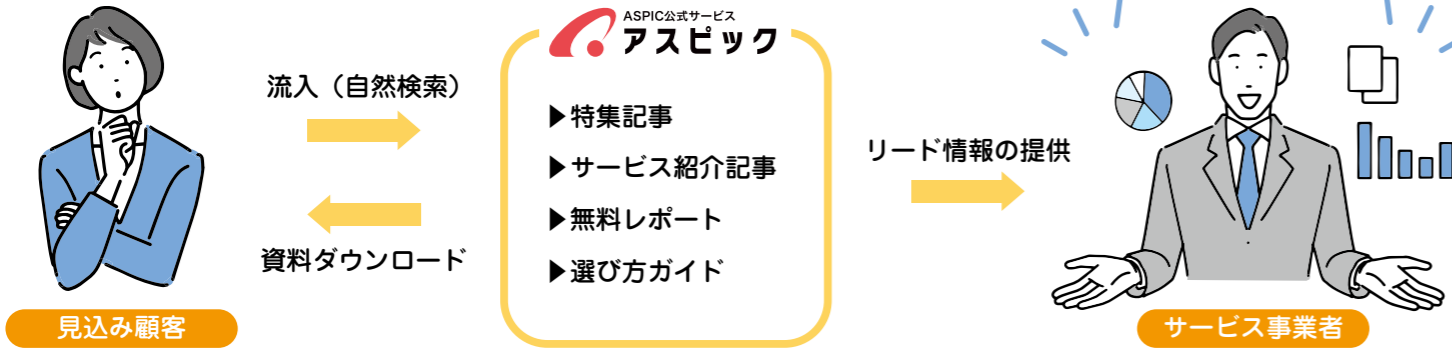
ユーザを獲得するなら ASPIC公式SaaS比較・活用サイト「アスピック」



その課題、
**ASPIC公式サービス
アスピック**
で**解決**しよう！



アスピックとは？
「アスピック」は一般社団法人日本クラウド産業協会（ASPIC）が運営する法人向けクラウドサービス紹介・資料請求型の比較サイトです。徹底したサービス理解をもとに様々なコンテンツを配信し、認知拡大・リード獲得のお悩みを解決します。



アスピックが選ばれるワケ

- SEO** 検索エンジンからの自然流入に強い！
「〇〇システム」「〇〇システム比較」などで検索した際の上位表示率は業界トップレベル。具体的な解決策を求めて検索しているユーザに訴求します。
- 独自の比較記事、サービス紹介記事が魅力！**
サービス選定に役立つ内容と信頼性のあるコンテンツを豊富に用意。「アスピック」の特集記事は、観光庁の「宿泊経営ガイドライン」（2023.1.20）でも取り上げられています。
- リード獲得や認知拡大への評価による高い継続率**
1300社以上が加盟するSaaS団体・ASPICが運営。成果と納得感のあるサービスを提供することによって、9割の掲載企業に1年以上継続的にご利用いただいております。



300 カテゴリー **1404** サービス **以上掲載**

アスピック

お問い合わせ先
一般社団法人 日本クラウド産業協会（ASPIC）
業務委託先 株式会社ブルートーン
e-mail: info@bluetone.co.jp
担当: 菊地、佐藤

「ASPICクラウドサービス検定」

クラウドスキルの証明を、
あなたのキャリアに。
~今こそ「クラウドがわかる人」になろう~

ASPICクラウドサービス検定なら

- ▶ クラウドの基礎～応用を体系的に学べる
- ▶ 総務省「デジタル人材の育成ガイドブック」に準拠
- ▶ 在宅受験・60分で完了
- ▶ 合格者にはブロックチェーン認定証を発行
- ▶ 企業・自治体・教育現場など幅広く活用可能



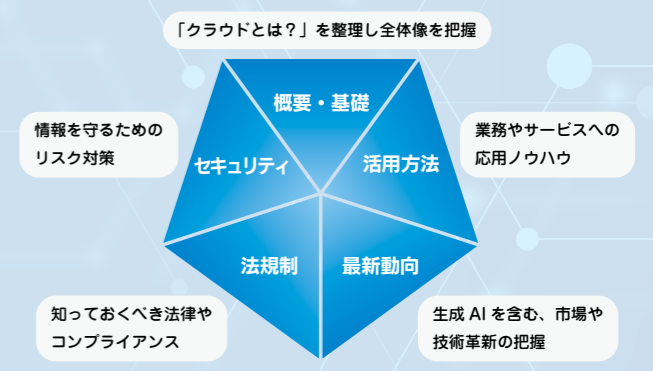
クラウドはいまや「社会の必須スキル」

クラウドはいまや、特定のIT分野に限られた技術ではありません。企業の基幹システムや行政サービス、教育現場に至るまで幅広く活用されており、私たちの日常生活に欠かせないスマートフォンアプリやオンラインサービスにも深く浸透しています。

このように社会全体において不可欠となったクラウドですが、真に活用するためには“使える”だけでは不十分です。クラウドの基本的な仕組み、セキュリティ対策、コスト管理、法規制やコンプライアンス、そして日々進化する最新動向までを幅広く理解することが求められているのです。

実務に直結し、基礎から最新技術までを網羅した本検定の

学習領域は下記の5つに整理されており、組織・個人の双方にとって大きなメリットのある内容となっております。



ASPICクラウドサービス検定概要 レベル：STANDARD

試験形式	オンライン試験（自宅・職場から受験可）試験時間：60分 好きな場所で、毎日いつでも受験可能です
出題範囲	クラウドの概要・基礎・セキュリティ・活用・法規制・最新動向
対象者	クラウド初心者、企業・自治体職員、学生、エンジニア、営業職など
受験料	13,200円（税込）※レベルにより変動予定

スタンダード本試験
全国一斉実施中
随時受験可能



ASPIC 一般社団法人 日本クラウド産業協会

お問い合わせ

[公式サイト] <https://kentei.aspicjapan.com>
[公式メール] kentei@aspicjapan.org
検定運営事務局：一般社団法人日本クラウド産業協会内



審査項目は必要最小限

クラウド利用での個人情報保護にも焦点

低コスト・短時間で取得

中小事業者のための「最初の一步」

ASPIC プライバシー認証サービス

デジタル化の進展により、介護・医療現場をはじめとした多くの中小事業者が日常的に膨大な個人情報を取り扱うようになってきました。一方で、サイバー攻撃や情報漏えい事故は後を絶たず、個人情報保護の重要性はこれまで以上に高まっています。

しかし、中小規模の事業者では、人材や予算の不足から個人情報保護に関する体制整備が十分に進んでいない

ケースも多く、個人情報保護法や関連ガイドラインにどこまで・どのように対応すべきかが大きな課題です。

こうした状況に対し、ASPICはこれまでクラウドサービスの情報開示認定制度や、介護DX推進の支援事業を通じて培ってきたノウハウを活かし、「誰でも取り組める認証制度」として中小事業者を後押しします。

中小事業者が直面する個人情報保護の壁

介護事業所の約70%が従業員1～9名の小規模施設
大規模な対策が難しい小規模事業者が業界の大多数を占めています

専門知識とリソースの不足により「何をすべきか」が不明確
法令で求められる最低限の対応水準が分からず、対策が後手に回っています。

事業規模を問わないサイバー攻撃の脅威

ASPIC 認証が提供する実務的な解決

中小事業者に最適化された「無理のない」認証制度
審査項目を必要最小限に絞り、低コスト・短時間で取得を可能にします。

クラウド利用特有のリスクにも対応した審査基準
責任共有モデルなど、現代のIT環境に即した管理策を評価します。

認証・研修・支援をワンストップで提供
単なる審査に留まらず、従業員教育や体制備まで継続的に支援します。

認証取得の流れ



※ 不合格時は修正指導あり／認定ロゴ使用は1年間有効

料金

年間認証料：**9万9千円** (税込) 一般社団法人 日本クラウド産業協会 (ASPIC)
次年度更新料：**9万9千円** (税込) [公式サイト] <https://www.aspic.or.jp>
[公式メール] pii@aspicjapan.org



編集後記

1999年の創立から四半世紀。弊協会並びに日本のクラウド産業を牽引いただいた理事・役員・会員の皆様をはじめ、大所高所からご指導・ご支援を賜りました総務省等関係省庁、大学・学術機関、関係団体の皆様に、心より厚く御礼申し上げます。

この度、25周年記念式典の実施報告を本誌特集として掲載する運びとなりました。企画準備から運営に至る4月から11月までの約8ヶ月間、100項目に及ぶ奮闘の記録を振り返りつつ、この一大プロジェクトの全貌をまとめることとなりました。プロジェクトの推進にあたっては、過去の「15周年記念式典」や「河合会長叙勲御礼の会」等を参考にいたしました。一部のスタッフにとっては初めての経験であり、業務の取りまとめに苦心する場面もありましたが、お互い持ち前の“ASPICファイヤー！！”（イベント終了時の締めの一斉発声）の精神で乗り越え、25周年の集大成を無事挙行することができました。

特に、来賓や記念講演講師の選定については、河合会長を中心に連日議論を重ねました。皆様に祝辞や講演を依頼した際、二つ返事でご快諾を賜りましたことに、改めて深く感謝申し上げます。式典当日は400名を超える皆様にご臨席賜り、御礼・意見交換の会、記念講演会、功労表彰式を盛大に執り行うことができました。中でも、来賓の方々から贈られた「ASPIC・河合会長への賛辞」並びに「ご意見・ご提言」の数々に触れ、会長が歩まれた25年の軌跡に対し、改めて敬服と憧憬の念を抱いた次第です。

また、式典での配布に向け並行して制作した本誌第2号「25周年記念号」では、4月から20数回に及ぶ編集会議を重ねました。式典直前の1ヶ月は連日深夜に及ぶ作業もありましたが、25年の歩みを記した年表の一つひとつの事象を鮮明に解説される河合会長の記憶力

には、驚かされるばかりでした。この編集作業を通じて、創業から現在に至る道程、そして「組織存亡の危機」を乗り越え「業界最大規模の団体」へと発展を遂げた過程を明らかにできたことは、微力ながらも貢献できた喜びと共に、感無量の思いです。

結びに当たり、小誌がASPIC会員様並びに関係者様への感謝の意を伝える一助となり、皆様のビジネスにお役立ていただければ幸いです。併せて、本誌の企画・編集に多大なるご尽力をいただいた株式会社アシヅカ関係者の皆様に、心から御礼申し上げます。

執行役員 花岡孝義

『ASPICクラウドマガジン』第3号

2026年3月31日発行

発行

一般社団法人日本クラウド産業協会 (ASPIC)

〒141-0031

東京都品川区西五反田7-17-7 五反田第1noteビル5階

<https://www.aspicjapan.org/>

発行人

河合 輝欣

編集委員 (ASPIC事務局)

高橋 伸之、高橋 慎治、見目 裕樹、門井 武司、志柿 隆信
花岡 孝義

ASPIC事務局

中村 亨、春日 俊一、日高 昇治、岩田 恵一
池田 幸雄、矢嶋 和也
吉田 憲正、宮地 秀親

株式会社アシヅカ

印刷・製本

株式会社グラフィック

貴社の成長を後押しする

ASPIC 入会のご案内

<https://aspicjapan.org/join/>



初年度会費割引
キャンペーン中!

- ・35万円→18万円
- ・18万円→9万円
- ・12万円→6万円

ASPICとは

一般社団法人日本クラウド産業協会 (ASPIC) は、クラウド企業と利用企業 1,400 社が加盟する団体です。

1999年の創立以来25年にわたり「クラウドの普及促進と市場拡大」、「安心・安全なクラウドサービスの推進」、「ASPICの組織強化とプレゼンスの向上」の3大目標を掲げ取り組んできました。

法人会員年会費

- ・35万円
- ・18万円
- ・12万円

(社員50人以下、資本金1億円以下、売上高10億円以下、うち2項目満たす場合)

(上記条件のうち、すべての項目を満たす場合)

法人会員の他、パートナー会員、アワード会員、公共会員、賛助会員、個人会員などの会員種別がございます。詳細はサイトをご覧ください。

ビジネスを強力に推進するASPIC入会特典

1

「クラウド研究会」「情報提供」等でAI・セキュリティ等の最新技術や政策動向の入手

2

「会員情報交換会や会員紹介・仲介」により、自社サービスの展開、ビジネス連携、ユーザ企業との出会い

3

「クラウドアワード」により、総務大臣表彰、総務省等マスコミ報道、アワードマーク活用

4

「情報開示認定取得」により、自社サービスの安心・安全をPR、官公庁入札資格、認定申請料無料

5

「クラウドサービス紹介サイト『アスピック』掲載」により、利用者情報の入手可能、掲載料無料

6

「新会社と会員企業とのビジネス連携」、AI等新規ビジネス創出、クラウドサービス検定割引

ASPIC4大支援「押す・引っ張る・支える・組む」(サービスバリューチェーン)



お問い合わせ先

一般社団法人日本クラウド産業協会 (ASPIC)
東京都品川区西五反田7-17-7 五反田第1noteビル5階
e-mail: office@aspicjapan.org TEL: 03-6662-6591
担当: 花岡



ASPIC

